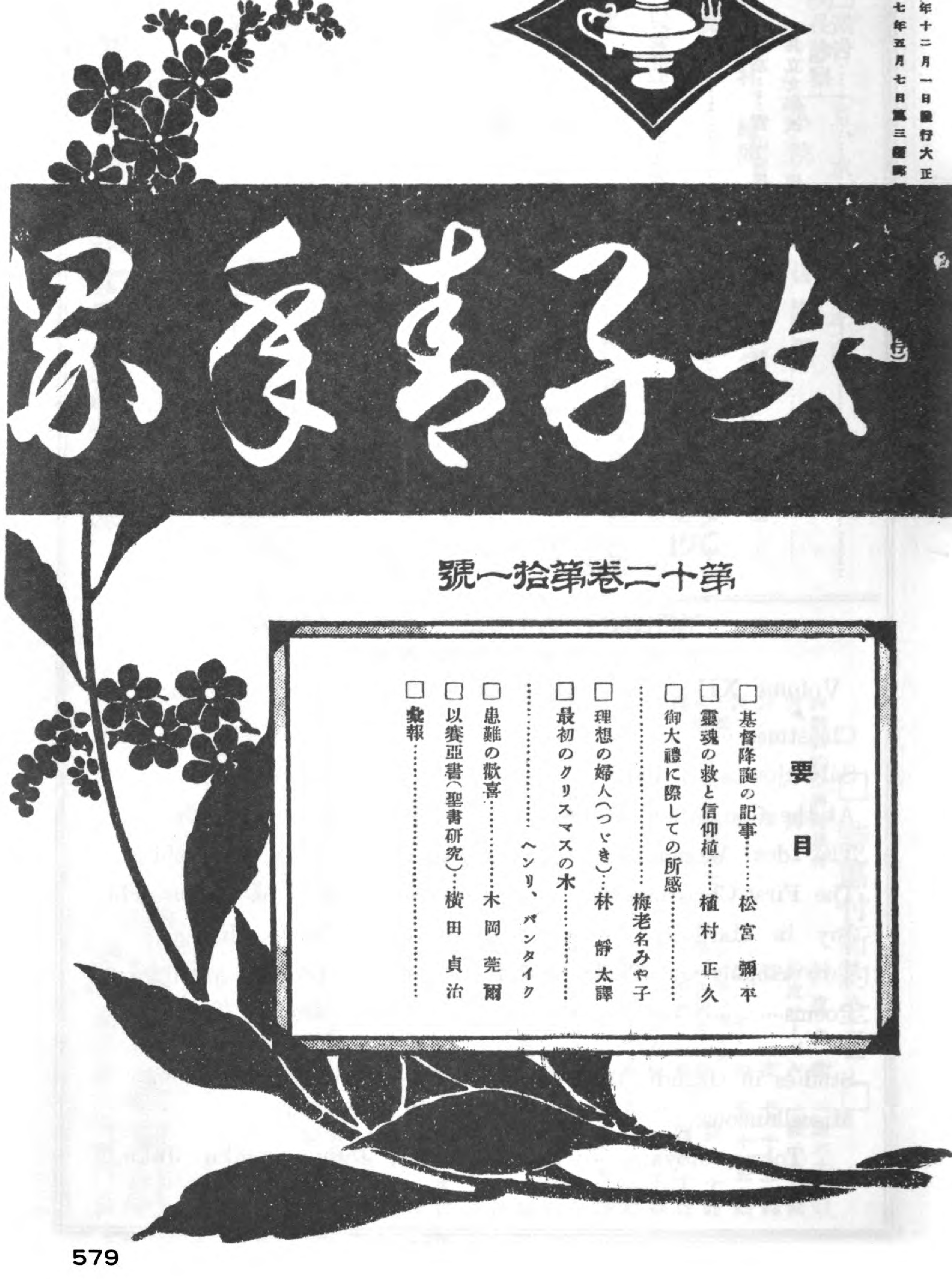
大正四年十二月一日發行 大正
明治卅七年五月七日第三種郵



女子青年界

第十二巻第拾一號

要目

女子青年會第十二巻第十一號

目次

YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

Volume XII December, 1915 Number 10

御大典樂器購入の好機!!

奉祝記念章附

特價提供



千歳一遇の御大典に際し

陛下の御高徳を讃美し、御登極を誠意祝福し奉るの道は御當日全國民擧つて、今回文部省御撰定**奉祝歌**を「君ケ代」とともに**高唱**するにあり。

更にこの際、金色燦爛たる我社謹製の**記念章**を附せる**ヤマノ**ピアノ/オルガンを購入或は交換して奉祝歌に和するあらば、一層感興を深うするのみならず、實に好個の記念なりと信ず。

弊社は以上の御要求に應じ、且つ奉祝の微意を表する為、此際御注文の樂器は、曩にショルッ音樂學校教授の推賞せられし優良品に更に精巧の技を加へ、一々斯道大家の鑑定を經て謹製の上**破格壹割五分引の特價割引券**を提供し、更に弊社が多額の費用を投じて謹作せる高尙優美なる

御即位記念章を無代附着す

希くは此際御買上げの榮を賜へ

速に目錄を請求あれ

△ピアノ目錄
△オルガン目錄
△樂器樂譜目錄

以上一種各別册 送料各貳錢

東京 **山野樂器店** 銀座

△樂器御注文は此券を切取り御添附の事
△有効期限は大正四年十二月卅一日限り
△ピアノ、オルガンは定價の壹割五分引

大典記念 樂器割引券

△舊松本製樂器は特に貳割以上割引
△ピアノ、オルガン以外の品は五分引
△本券は一回限り有効、前金の事

松本樂器合資會社改メ

東京銀座 **山野樂器店** 電話京橋 二二九八



The fields around lay bare to the moon.

基督降誕の記事

松宮彌平

烏兎匆々に過ぎて、今年も既に年末號を發刊するやうになつて、例の通り基督降誕節を祝ふ時になつた。私は此の機に於て基督降誕を記念すると共に、福音書の始に現はれて居る基督降誕の記事に就て、二三の所感を述べて見たいと思ふ。

私共は基督傳を研究するに當て、之を全然架空的傳說的の記事とのみに見做すことが間違であるやうに、其の記事を以て悉く今日の文明社會に於て見聞する事實を記錄したものと同樣に考へることも亦頗る危險であるといふことに注意せねばならぬ。殊に英雄豪傑といはれて居る古來の偉大な人物の生涯には種々の想像や言傳などが附け加へられて居る場合も多いのであつて、悉く書を信ぜば書なきに若かずと思はしめるやうなことも少くないから、それ等の點は私共に於て深く氣をつけねばならないことになるのである。獨逸のノイマン博士は、基督傳の研究には穀と實とを區別せよといふやうなことを言つて居るが眞相を探究する上からいふと、それは本當のことであらうと思ふ。

かういふ立場から基督降誕の記事を調べて見るならば、基督降誕の記事は最舊の馬可傳には一言も書いてなく、馬太傳の第一章の後半に奇跡的誕生の事

があつて、更らに三福音書中の最新である路加傳に至つて事細かに其の事柄が書き立てゝあるといふやうなことは、どうも眞事實を包み且つ飾つた想像や傳說などが附け加はれた所もあるではあるまいかと想像されるのも止むを得ないことである。

　しかし、事實を事實として受けるといふ事は、學ぶ點からも、信ずるといふ點からも大切なことで、ノイマン博士の所謂殼と實とを區別して殼は殼、實は實と仕分をして、其の眞諦を捉へることが出來るならば、を更に容易に得ることの出來ない大なる敎訓と暗示とを受けることも出來る。かくして得たるものの上に築かれた信仰は最早搖ぎのない確乎不拔のものとなるのであらうと思ふ。

　そして、私は遠慮なく申せば、基督降誕の記事を聖書に書いてある通りに、其のまゝを事實として受け入れる事は一方ならぬ、困難に際會するやうに感ずる。例へば[illegible]は處女からお生れになつたといふ事にしても、基督はベツレヘムで御誕生になつたといふ事にしても、それから埃及へ御避難になつたといふ事にしても、ヘロデが基督を殺さうと思つて二歲以下の嬰兒を殘らず虐殺したといふ事にしても、これを科學の方面から、又歷史の方面から、將た我々の常識の方面に訴へての考から見ても、どうも困難な問題であるやうに思はれる。

　のみならず、斯樣な記事がどうして基督降誕の記事中に現はれたかといふ事や、又それが現はれるやうになつたかといふ經過などに就ても、色々と考究して見ると、今一々それを詳しく述べることは出來ないけれども、さうなつて來た經過も、さうならねばならぬ理由も、それ相應にあることであつて、さういふ事が漸次に明かになつて來るに從て、科學や歷史の事柄に一致しない點までも、强て眞實の事柄のやうに主張することは、餘程無理をせねばならないことになる、私はそんなに無理をすることは更らに必要のないことであらうと思ふ。

　さればといつて、私は決して聖書の價値を引下げ

たり、聖書の記事を輕蔑したり、之を排斥したりするのではない。若しさう考へる人があるならば、それは大なる誤解である。元來聖書の價値を定むることは、其の記事が歷史上の事實に合致して居るとか居ないとか、科學上の原理に背反して居るとか、居ないとか、さういふことで決するものではない。福音書に筆を染めた福音書の記者も亦決してかゝる研究の題目を提供せんがために筆を採つたものではないことは明である。若し地下にある福音記者が、今日のやうに福音書の一字一句を捕へて根堀り葉堀りやれ科學の原則に反して居るの、やれ歷史の事實と一致して居ないのと騷いで居るのを見たならば、其の著述の目的に添はない研究を殘念に思ふと同時にそんな問題のために力瘤を入れて爭ふの大人氣なさに苦笑するであらう。斯る研究の必要點は唯事實を事實として承認し得らるゝやうに明にすればよいのである。前に言つた通りノイマン博士の所謂殼と實とを區別すればよいのである。かくして其の事柄の眞相を捕捉する事が出來れば、それが私共に滿足と確信を與へる基礎になると信ずる。

　如上の見地からして私共は聖書の記事に對し如何に見るべきであるかを考へたいと思ふのであるが、殊に玆には基督降誕の記事に就て如何に見るか、私の考を述べて見たい。蓋しこれが私の本稿に筆を採つた所以なのである。

　さて、福音書の基督降誕の記事を讀んで如何に感ずるかといふと、直に感ずることは實に崇尙森嚴なる詩を讀むやうな心がする。そして其の敍述は双びなき敬虔の念に充ち滿ちて居る。私は基督降誕の記事は此の所に其の價値を認めねばならないと思ふ。天の使が現はれて物言ふ筈はない、處女降誕は科學で許さぬ、東方の博士が見たといふ星は天文學に於て立證が出來ない、嬰兒虐殺や戶籍調査の事は歷史上に於て符合しない所があるといふやうな事のみの詮議をして居れば、それは確にそれに相違ないと思ふ、けれども靜に其の記事を調べて見ると基督の降

誕を叙すると共に現はれた崇高な思想敬虔な信念が其の記事の全體に磅礴として行き渡つて居ることも優に認めねばならない事である。そして其の記事を各個別々に考へて見ても、如何にも宏大なる理想や深遠なる教訓や暗示が讀まれる。それ等が科學や歴史に合致しないといはれる諸般の記事の中に經緯をなして、眞に得易からざるの大詩篇を作成して居る私は研究詮議の結果、降誕の記事が不明瞭なる境界を離れると同時に一層明確なる信仰的敬虔的の修養を吾人に與ふるものになつた事を思ふと深く感謝し且欣ぶのである。

今、其の點を掻摘んで降誕の記事のうちの二三記事に對する私の考を述べて見やう。

(一)東方の博士が尋ねて來たといふ事(馬太二〇一節以下)を考へて見ると、堂々たる學者博士がユダヤの寒村に生れた一嬰兒を拜するために禮物を携へて來たといふことは、實に謙遜にして實着なる學者の態度が偲ばれる。同時に敬虔なる學者と基督との契合點を見出し得られるではあるまいか。殊に天の星の異徴を見て尋ねて來たといふ事は、更らに此の事件の色彩をして何となく床しく感ぜしめる。世間幾多の輕薄なる學者が俸祿の爲に奴隷となり慢心倨傲の捕虜となつて、天地の神の下に謙虚なるものが少ないことを思ふと、其の間に深い〳〵暗示があるのを思はざるを得ない。

(二)羊飼が基督を拜した事(ルカ傳二〇八節以下)羊飼が天使の告を蒙つて基督を拜したといふ事は、如何にも平和と喜悦の繪畫を見るやうな心持がする。天の使が『至高には榮光神に在れ、地には平和、人には惠澤あれ』と歌ふ所、何ともいひ得ぬ天の惠を味ふ平和な空氣に包圍された樂園が見えるやうである。そして其の書材は柔和な羊と淳朴な羊飼である。其の背景は今や旭日の昇らんとする明け方の平和な原野である。これ程上品な敬虔な和樂な圖があらうか、今や世界は利と利の爭、權と權との爭に日もこれ足らず丸で惡魔の修羅場と化して居る。何と淺ましい輕薄

な殘酷しい世の中の有樣であらう。基督は平和の君である。基督の主義精神が此の世に行はれるのは即ち天國の建設せられる所以である。其の時期の到來は早かれ遲かれ必ず期待し得られる事である。其の時こそ平和にして喜悅の樂園に基督を跪拜するの時である。此の羊飼の圖は蓋し其の豫表とも見るべきではあるまいか。

(三)ヘロデが嬰兒を虐殺したと云ふ事(馬太二〇十八以下)これは基督のお生れになつた時にヘロデがユダヤの王として生れたものがベツレヘムに在ると聞て不安の念に驅られて、二才以下の嬰兒を殺してしまへば、自然其の中に其者も含まれて居て王位を覬ふものは亡ぼすとが出來るといふ所から、其町の二才未滿の嬰兒を殘らず虐殺した、處が王者として生れた基督は其前既に埃及に逃れたので其の虐殺を免がれたといふのであるが、これも亦深い意味を以て考へられる。

默示錄にかういふことが書いてある。

爰に天に一人の婦あり、日を着、月を足の下にふみ、首に十二の星の冕を戴けり、彼既に孕み居りしが、子を産んとて甚く苦しみ泣き叫べり、また一筋の大なる赤龍あり――此の龍、子を産まんとする婦の前に立ち、産むを待つて其の子を食はんとす、婦子を生めり、其の子鐵の杖をもつて萬國の民を支配せんとす、彼神と其の寳座の下に擧げられたり、婦逃れて野に行けり。――かくて天に戰起れりミカエル其の使者を率いて龍と戰ふ、龍も亦其の使者を率いて、これと戰ひしが、勝つこと能はず、且再び天に居ることを得ず、是に於てこの大なる龍即ち惡魔と呼ばれ、サタンと呼ばるゝ者、全世界の人を惑はす老蛇、地に逐下さる、其の使者も亦ともに逐下されたり、天に大なる聲あるを聞けり、曰く我等の神の救と能力と其の國と神のキリストの權威今既に至れり、そは我等の神の前に晝夜我等の兄弟を訴ふる者既に逐下されたれば也、我等の兄弟は羔の血及己が證せし所の道によつて之に勝てり、彼等は死に至るまで其の生命を惜まざりき、是故に天と天に居るものは喜べ、地と海は禍なるかな、そは惡魔己が時の幾何もなきを知り大なる怒を懷きて汝等の所に下れば也。

私はこれを讀んで見て、此の默示錄の記事は想像であるか傳說であるかは知らないが、全く基督の降誕に就て書いたものであるやうに感じる。即ち基督の降誕と其の最後の大勝利を現はしたものと見る事が出來るのである。爰に赤龍といふのはヘロデであつて、そして彼は婦が子を産むのを待つて之を食はんとして居る。これ基督降誕後直にヘロデの災厄が其の頭上に臨んだのと同じてある。しかし婦から生れた子は鐵の杖を以て萬國を支配するとある。そし

て其の子は赤龍の難を免かれたのみならず、終に赤龍の全軍を討滅して救の力と神と救主の權威をもつて天下に臨むに至つたとある。これ基督がヘロデの虐手を脱して埃及に落ち、軈て神の勇者となつて、ヘロデの代表した罪と惡との此の世の勢力を征服して最後の大勝利を占めて靈の國の王者となるといふ事を見られるのである。此の嬰兒虐殺の記事によつて示されたものは決して空談傳說的のもののみ看過する事は出來ない事が分る。

（四）ナザレ人と稱へられんためにナザレの村に行つたといふ事（太二〈二十三〉）このナザレ人といふことは單だナザレ村に住居する人といふ意味であるかと考へて見ると、こゝにも亦深い意味があるのを發見する。舊約士師記の十三章の五節に「神のナザレ人」といふ言葉が書いてある。其の意味は「神に身を献けた人」である。そして其の職責は「イスラエル人をペリシテ人から救ふ」にあつた。今基督が此の世に在つてなされた事蹟に就て見るならば、終始献身の人であつて死に至るまで誠實に神の意に從つて働かれた。そして其の職責はといへば士師記のナザレ人がイスラエルをペリシテ人から救ふことであつたやうに、基督の作業は此の世の惡の勢力の範圍から我々を救出さうとするに外ならなかつた。基督はガリラヤのナザレ村の住民であつたに相違ないが、更に此の献身の人たる「ナザレ」人たらんためにガリラヤのナザレ村に人類救濟の準備的修養の幾年を過されたと考へる時に、ナザレ人と稱へられんためにガリラヤに住み給ふたことの、即ちナザレ人といふ意味の如何に深く且大なるかを味ふことが出來る。

以上は基督降誕の福音書の記事に就て私の所感の一端を述べたに過ぎないが、其の外の記事に就いても一々これを調べるならば、各別に深い意味を味ひ且教訓に接することが出來るのである。どうぞ私共は此の降誕節に際して基督降誕の記事を讀むに當つて、此等の點にまで思を致して、お互か救の道に進む助けとしたいと望む次第である。

霊魂の救と信仰

植村正久

「我儕退きて沈淪に及ぶべきものに非ず信じて霊魂の救を得べきものなり」(ヘブライ書十章三十九節)

こゝにおける救を得るとは霊魂をもうける獲得する、霊魂を己がものにすると云ふ事で吾等が各自己を領有すると云ふのがこの意味である。何にでもこれを確得する、これを取つて己かものにすると云ふには餘程意氣込の盛んな努力、奮闘の意味が潜んで居る。さうして恰かも虎や獅子の如き猛獸が餌物を捉へんとして盛んな意氣込をもつて一時體をすくめて居るやうに、われ／＼の氣分は自分と云ふものを領有し全うするに就いて緊張したものでなければならぬと言ふ意味であります。獲得し己のものにすると聞けば忽ち心に聯想されるものはエスが屢々云つて居られる「失はれたもの」である。神を知らぬもの信仰に遠ざかれるものは損失を來し滅亡に落ち入り全く名なしになつてしまう。さう言ふ實におそろしき事が我々の身の上に附きまとふて居る。まごまごして居ればその破目におちいる。これを考へて見ると實におそろしい。しかしまかりまちがへばさう云ふやうな成行にならねばならぬといふ事が霊魂を得ると言ふ言葉の内に籠つて居る。

一體人間の霊魂は保險付で神の慈愛その他の同情などから考へてどうも神より擇ばれた者が亡びると言ふ事はありそうでない。一人殘らず救はれるだらう、永遠の亡びとはあまりに苛酷であると云ふ人があるが、世の中には物にならずして終る者が多い。病氣でも或る程度を越す時は決して直らない。然るに霊魂のみが亡びる事はないと云ふのは餘り自分勝

手な言ひ分である。よつて恐ろしい事ではあるが、永遠の滅亡と云ふものはあるものであるから、恐ろしきものより戰慄して救を全うする方がいゝと思ふ

この一面に於てはまかりまちがへば斯くの如く亡びると書いてありますが、この聖書の句を見れば、『われら退きて沈淪に至るべきものにあらず』とあります。この『退く』と云ふ事は畏縮すると言ふ事である。これを舟に譬へて云へば、帆を下げると同じである。即ち風を帆にはらんで進んで居る際、何かおそるべき場所に來る場合に帆をさげると云ふ意味であると云つて居る人がありますが、恰度人間が精一ぱい吹き來る風を受けて進み行くその勇氣が乏しいために疑ひ惑ふて帆を下げてしまつて一向先に進み出ない。さう云ふ形の生涯を送つて行く、されば遂に今言ふ通り滅亡に至るのである。しかし反對に信仰によりては己を獲得して、己を己がものになしこれを維持してまた〳〵强め擴げて深からしむる事が出來得る。

私共の内には必ずこの潛んだ生命がある、未だ全く出來上つて居らない、内に秘してある命がある。もし、それがなければ人間と云ふものは淺ましいものである。斯く現在吾々が生き長らへて居る樣を見れば、實に淺薄である。これぎりであるとすれば情けなく恥かしい事であるが、反對に未だ十分活用してをらない表にあらはれて居ないものが、各自の内に潛んで居ると思へばこそ、實に人意を强からしむのであります。

靈魂を獲得せよ、己れを領有せよと敎へらるゝのは、未だほんとうに手に入れないものが殘つて居る寶の持ち腐になつて居る事を示すもので、一面には心配なれ共、一面には又嬉しく奮發心の勃發するを覺える。然らば如何にして自分のものになし得るかと云ふに、此句に書いてある樣に信仰によるのである。然らば信仰とは何か。信仰とは神と同盟し友達になる力を貰ふ事である。車は唯車のみにては動く事は出來ぬか、電流をこれに通ずればおもきものを

載せて疾走するやうに、我々がこの信仰をもつて自分より以上の力と結托し連絡がとれたる時には、自分の心にひそめる生命が十分に開拓されて行く事が出來る。我々が自らを支配して行くと、今までの經驗では碌々事がなかつたのが、キリストを我々の主人とし、この魂全部をキリストに捧げて其の政治に從ふ。これが信仰であつて、こゝに於てはじめて我々が眞實に靈魂を支配する事か出來得るやうになる而して多くの人と意見を異にし反對多きときは正しき事と思つてもこれを實行する丈の元氣なく憶病になり進まんとするも進む事得ざる時にも、これを遂行し得る勇氣が與へられるのである。又誘惑が機會をねらつて附き入らうとしてをる時も、この誘惑に打ち勝つ事が出來る。これ信仰によりて始めてなし得らるゝ處である。確かに信仰あるものは己の靈魂を維持し其領分を全うし得るのである。誰しも敵に蹂躪されぬ様、多數のものにまけない様に、良き事はこれを進んでなすと云ふ勇氣がなければ、この爭鬪ある場合に枕を高うして寢られるものでない事は感じてをる。さう考へれば我々が信仰によりてこれを全うする事が出來るとは嬉しき事で、一生懸命に仕様と云ふ勇氣が生ずるのである。信仰を得れば心の中心とする處が異つて來る。今までは吾儘勝手自己中心であつた人が、利己心に驅られて居る間は、其心は決して滿足はない、常に淋しい然かも卑しい見る蔭もない姿である　それが信仰生活に入り自分と云ふものを差し出して神の用に供する、己れを忘れ身を捧げてキリストのため又キリストの報ひのため、引いては人のために捧げると云ふ事になれば、其の心は實に美はしく華やかである。

人が唯自分ばかりを求め、自己を中心と　て行けば、恰かも帆を下げて風を十分に受けない船の如きもので、ヘブライ書に書いてある退縮すると云ふ事になる。しかしエスキリストに敎へられ、しかも十字架によりて敎へられた神の愛を知りこれに報ひねばならぬ事を感じて信仰生活に入り、自己を捨て自

己を捧ぐる時は一時は厄介を引き受けた様であるがこれが他日献身犠牲の生活をする時は非常な力を出すものである。女は子供をもつて豪らくなる男子は或は父の死などにあつて後一家を引き受けこれを支へる様になる。この献身犠牲から思ひかけぬ力が生ずる。其の最大なるものが信仰である。一口に云へば信仰は自分を中心とせる生活から神を中心とし自分をキリストに献げ、これを愛する生活に移る事で恰度キリストが富める少年に其持物を賣りて我れに從へと云ひ給ひしが如くであつて、限りなき生命無限の新らしい生命は混々として盡きないのである。

宗教は意識でない、感ずる事ばかりでない。しかし情も思想も皆こもつてをる。信仰即ち人間全部の活動である。人間が座してのみ居る時は頭は働きても他が働かない。鍛冶屋は手のみを働かせるけれど他の部は發達しない様に、人間の肉體も腦力も絶へず活用せる處はいよ〳〵發育すれ共、他の用ゐない處は萎縮して滅亡する。例へばいつも黒暗き處にあつて目を使はぬ時は、遂に目を損し盲目となるやうなもので、持てるものは與へられ持たぬものは持てるものをも取られるとはこの事である。信仰は人間の靈魂全部を働かせるもので、恰度體操の如きものである。我々には現在の我と理想の我とがある、現在の我を見て其の見すぼらしさを知つて情なくなり理想の我れに進み度いと云ふのが聖賢の教へであつて、カントの哲學なども又玆にある。キリストにあるものは新らしき生命が得られると云ふのは即ちこの現在の我より勝る善き我を玆に現はすものなるを説いたのである。

信仰によりて靈魂を得て領有すると言ふ事は、この理想の我を全うすると云ふ事である。如何にすればこの善き我を全うする事が出來得るか、未だ芽も出て居ないから實を結ぶ筈がない。しかしなほ現在の姿を見れば情けなく甚だ萎縮して居る、時としては風前の燈火の様に見える。この時信仰によりて靈魂を獲得し、これを領有すると云ふ考へが必ず出る

べきである。而して信仰を遂げ己を全うすると云ふ事は全然信仰の力によらなければならぬ。今日世の中には自殺といふ恐ろしい事がある。それがいよいよ流行して高き處から瀧壺に飛びこむ人などが日々幾人となくあるが、しかしこれよりもなほ恐るべきは靈魂を失ひ自分の内にあるよりよき己を生き埋めにしてしまひ、氣息喘々たる我の呼吸をとめて殺しつゝある事である。これ程恐しい事はあるまい。どうぞ我々はこの自分の内にひそめるもの神の子となり立派に生長されて行くものを壓迫し殺してしまはないで、精一杯發達させたいものである。『われら退きて沈淪に至るべきものにあらず』私が先に云つたやうに帆を下して尻込をし善を見てもこれを進みてなす事の出來ない意氣地なき靈魂は捨てゝ信仰にすゝむべきである。なか／＼この沈淪と云ふ事は說き盡す事が出來ない、この恐しい果、まご／＼して居れば永遠の滅亡に至る事は實際あるべきものである。しかし信じて十分に帆をはり風を受け實に勇ましい氣分をもつて世に立つときは自己を領行し決して實のもちぐされをしない十分にこれを活用しいよ／＼熾んならしむる事が出來る。これが信仰の道である。

夜も十分睡眠しないで机にかぢりついて勉強して居る。これは結構な事ではあらう、靈魂は畏縮して衰へ、帆を下した樣になるのである『全世界を得るとも其の靈魂を失はゞ何の益あらんや』とキリストが宣ひし如く、學校における成績がよく點數が高く、名譽を得る、職業にありつく、皆結構な事であるが靈魂の事を考へない時は蠟燭が漸次消え行く樣に靈魂が耗りつゝあるのである。退いて沈淪に行くものでない。願はくは信じて信仰を全うするものになりたいと思ふ。（文責在記者）

御大禮に際しての所感

海老名みや子

今日は誠に御目出度い日で御座いますが、是の御目出度い式は日本國中津々浦々に至るまで同じ様に致してるのであります。然し私共が今皆様と一所に此新しい奇麗な建物に於て同じ心持ちをもつて此式を擧げて居るやうに、何處に於ても同じ心持ちで御祝ひを致して居るとは思はれません。然し兎も角私共は如何なる心持をもつて此大正の盛儀を御祝ひしなければならないでせうか。皆様の間には明治の初年などの事は御存知ない方が多いと思ひます。只今は明治も終り、世は大正に移つて居りますが、此明治から大正に移る時、其前の慶應から明治に移る時如何なる考へを持つて居つたでありませう。此慶應から明治に移る時、私は極幼少でありましたので後の考へもなければ、苦しみもありませんでした。然し私の親族の者の話や兩親より語りつたへられた話などを合せて御話し、これを今日の御祝ひと致し度いと思ひます。明治以前は皆様も歴史で御承知の事と存じますが、當時は政治の狀態、社會の制度等全然異つて居りました。例へば政府も人民も鎖港攘夷を唱へ、國は大名小名三百諸侯のものでありました又社會は士農工商の四階級を嚴守して居りましたが維新に至つては幕府政權を朝廷に奉還するや、諸侯も又其版籍を奉還し、階級の別は取り去られて四海平等と云ふ事になり、開國進取の國是はたてられ、皆同じく天皇の爲に盡さうと云ふ事になりました。此處に至るまでには隨分多くの犧牲や努力がありました。先年崩御ましました明治天皇を戴いて、憂國の士は皆種々これがために努力し又或る者は國のた

め其の小さい子を遠き米國の地に送りました、只今では殊に便利で、私も先達て行つて參りましたが、横濱から船に乘れば、陸上に居ると少しも違ひなく却つて樂しく遊んで居る間に十五六日もすれば米國につき又着すれば青年會などがあつて、種々便利を計つて與れるのでありますが、五十年前の有様は到底想像もつかない程であります。然らば如何にして當時の人は軍事なり政治なりを外國で勉强したかと云ふに、長崎から出て紐育に行くには六ケ月もかゝつたのであります。それは少さい船に乘つて印度洋を超え、亞弗利加の希望岬を廻つて大西洋に出で小さい島に立寄り、漸く紐育に着くのでありました。然かも其船では普通の船客としてでなく、日本をぬけ出し、名を改めて、船中ではボーイの代りなどをして漸く行つたのでありました。私の親族にも二人かうして參つたものでありますが、彼れ等は十七より二十位までの青年で共に海軍を勉强したいと云ふので紐育に渡つたのであります。彼等は先づ鐵砲を習い度いと思たのでありますが、第一肝心の言葉が分からない、それ故漸く小學校に入學し、それより種々苦學をして、八年十年を經て歸へりました、又一人の者は體が薄弱であつた爲遂に病死しました。これと今一人の子供を離したのは老いた母親でありました。これは明治以前慶應の事でありますから、其別離の悲哀は大變でありました、今日唯三年四年の留學さへ、其別るゝ時母として妻として心淋しく思ふのは人情であります、されど況や明治以前に於てをやであります。然るに其二人の小供をも離すと云ふにはこの夫人に非常な決心と、國のため此の子を献ぐると云ふ誠意があつたからのみであります。此婦人は實際二人共其子を捧げて居ります、彼の女は其二愛子共の訃を知つた時全く失望し、世をはかなんで居りましたが、今はこの婦人は七十を越え基督を信じてより其憂は消えて喜びとなり、其愛子を神に捧げたるを感謝してをります。今日日本の如斯文明の域に進み盛大になつたには今申したやうな事

が多くありました、心ある人は非常に努力し、五年十年と夫が留學した時は一言の小言不平も言はず、僅かの金をあづかつて家を守りて行きました。然し大正の今日には、自ら如斯事に遭遇した人は少なく、大低子として聞き傳へるのみであります。今日の如く世界に其威風を輝すに至つたのも、開國進取四海平等と云ふ事を決行されたからであります。

私は先達て一寸米國の地に居る同胞のため主人と共に參り其時彼地にある婦人達の狀態を見て參りましたが大いに感んずる處がありました。私達は幸ひに早くから基督を知りこれを信じて居るので、外國人に對しても同胞と云ふ感じがあり少しも變らぬ事を思つて居ります。又今日此新らしい女子青年會館に參り、幸にも御一緒にこの御祝ひに連る事が出來る事を誠に嬉しく存じます。

私は米國に參りまして、婦人運動の烈しさが想像以上であつたのに驚嘆致しました。我が國に於きましても婦人の教育が漸次隆盛になるにつれ、婦人も一見識を有するやうになり宗教的、教育的等の運動を興さうと努力致して男子に其權を要求して、其覺醒を促して居ります。然し其時男子が是に應じざれば失望し、又は泣寢入りを致して居りますが、是れは間違いであつて婦人自ら男子に依らずして立つべきであります。皆各自の仕事でありますから、男子に要求するのは誤りであります。家庭に於いても、親のため、子のため、夫のために其の腸を絞つて努力奮鬪して居るのは婦人であります、然るにこの國の基家の守りであるべき婦人が道徳に對し徹底した考へを持つて居るかと云ふにさうでない、先日文展に參りましたがぢつと繪を眺めて居る時此度の展覽會には美人畫が非常に多く、其內でも最も多勢な人が集まつて魅されたやうに眺め入つて居る元祿時代の美人畫から現今の美人畫まで一つとして私に氣高い崇高など云ふ感じを起させるものを見出するが出來ず殘念に存しました、そしてこれが國の守りであるべき婦人を寫したものかと淺ましく感じました。

是れ則ち、其婦人の内に何他人に崇高な感じを與ふる高いものが出來上つて居ないからであります。其がため此尊い國に生れながら世界の何處に行つても國の品性を落して居る婦人が非常に多くお恥かしい次第であります。私はこの文展の畫を見て、如斯であるから國威を落すやうな事をして居るのは致し方がないと思ひました、あいにやけた婀娜しい様子をしてどうして國を守る事が出來るか、どうして男子をして婦人に對し愼み深くこれを尊ぶに至らしむる事が出來ませうか、誠に我國に於て婦人の要求は拒絕せられ、常に男子の横暴に壓制されて一つの玩弄物視されて居ると云ふ事に對しては婦人自ら大いに其責を置くべきであります。然しこの文展の繪に描寫されて居るものは眞の尊むべき日本婦人ではありません、こゝに集まつて居らるゝ皆様には宗教を信じ外國の勉强をもして居らるゝ方が多い事であります故、男子より玩弄物視されるやうな事はありませんから、私は眞心から皆様に申します、何卒各自が心掛けて自らの品性を高め、日本の道德の基礎を建て女子をして崇高なるものとなし、日本を高くすると云ふ決心をして戴き度いのであります、皆様が家庭に入られた時は家庭の守神となつて夫を助け子供を育てゝ頂き度い、又社會に出て働く方は矢張り守神たるの心持をもつて教育事業其他の事に努力して頂き度いと存じます。若しこれが出來れば日本はいやが上にも立派なものとなり其國威は世界を風靡する事が出來ます。

米國其他の諸外國に行つて居る人は日本の上流の好い人ばかりではない、或る者は勞働者として行き或る者は仕事を見付けに行つた者が多いのでありますが、其の子供は其地の學校に行つても、少しも成績下らず、寧ろ高い處にあると云ふ有様でありますから、如何なる下等社會の者と雖も日本人の腦力は決して低いものでないと云ふ事が明かになりました然し一つ缺乏して居る事は宗教や道德に關する觀念が誠にあやふやである事で御座います。これがため屢々侮を受けて居ります。我國に於て近頃貞操等に關して種々論ずる者が多くありますが、こは兎

や角論ずるに及ばない事であります、論ずるよりも皆が堅い觀念をもつて其基礎をとらへて行く事が必要であります。

智識物質などに於ては明治の世に多くの犧牲がはらはれて、一通り其頂點に達しましたが、道徳宗教の點に於ては未だ其根據が確定して居　ません。此度の御大典のため、度々方々に於て淸めの式が行はれましたが、皆一つの儀式として行はれたのみで國民には何の影響する處もありませんでした。即宗教と儀式とが別々になつて居ります。かゝる時忠君愛國の眞の精神をもつて、我國の宗教、道徳の根據を堅め、大正の御代には此精神が何處を切つても國にも家にも滿みて居るやうに致し度いと存じます。皆樣は御若いのであるから、恰度維新の際物質的文明のため靑年達が献身犧牲を厭はなかつたやうに、これに劣らぬ決心をもつて努力して行かるゝ事を望むので御座います。私は御大典の御祝として、此御決心を御願ひ致すので御座います。

（東京靑年會御即位奉賀會席上講演摘要）

各組教授開始

左の各組教授を開始す。志望の方は御申込ありたし。

英語會話教授

月水金　自午後三時半―至同四時半
同　　　自午後七時半―至同八時半
教師　ミス、イーストレーキ

體操教授

月木　自午後三時半―至同四時半
同　　自午後六時半―至同七時半
教師　ミス、マクロイ

西洋料理教授

火　自午後二時―至同四時
教師　ミス、カウフマン
水　自午後二時―至同四時
教師　小此木武子

生花教授（池の坊）

火　自午後三時半
教師　渡邊のぶ子

申込用紙御入用の方又は詳細の事は本會事務所に就き御照會ありたし。

東京市神田區北神保町十四番地

東京基督教女子靑年會

電話本局五九八番

「理想」の婦人（三）

林 靜 太 譯

詩人ペトラークとラウラ――『純潔朝露の滴りにも競はん』――

（承前）

今やラウラの眼は人を感動かすものとなつた、即ち『彼の親愛しき淑女の右の眼より彼の右眼に迄』彼女が苦惱せさ時、其苦惱は光の發射するが如くに傳移つたと、ペトラークは言つて居る。

"The ill whice less my pain than pleasure makes
As if it intellect possessed and wings,
It passed as stars that shoot along the sky."
(Anon's translation.)

『愉快を作る(と言はん)よりも、吾が苦痛を輕減からしむる此苦惱は
恰も智慧と翼翅とを有てるが如くにて、
空を流るゝ星のごとく過ぎ行きぬ。』

斯して彼ペトラークは、二十年否幵以上にも亘つて彼女を戀した、而も幵は全然無益事であつた。『吾は水中に鍬を用ゐたり、砂上に家を築けり、空中に文字を書せり』と、失望の餘は此く叫ぶのであつた。

後彼はアヴヰグノンを訪れたるシモン●メムミに乞ふて、戀人ラウラの肖像を描かしめた。いみじくも髣髴たる其面影に題して――

"The work, indeed, was one in heaven alone
To be conceived, not wrought dy fellow-men,
Over whose souls toe body's veil is thrown:
'Twas done of grace: and fail'd his pencil when
To earth he turned our cold and heatt bear,
And felt that his own eyes but mortal were."
(Macgregor's translation.)

『實にも是はこれ、單り天に於てのみ孕まるべき
作品にて、
其精神の上に身體てふ被覆の落されし
地上の人の豈作し得らるべき、
幵は恩寵に由りて作られき、吾等の暑さ寒さに
堪えん爲地に振向く時
彼は其筆を過ちて、
己が眼の唯淹れたるを觀んのみ。』

臨終の際迄もペトラークは、彼の戀たり詩想たる此像をば肌身より離さなかつた。

而も或る時に於てはラウラは、快く切なる思ひの彼をして、數分間づゝ腕をば握らしめたのである。彼のイタリーに歸るに當りて最後の莚に、日頃親しふせる友人等の間に交れる彼女を見た。其時の彼女は『未だ綻びやらぬ蕾に圍まれて一輪咲き出し美はしの薔薇花の如くに』見えた、と彼は言つて居る。『彼女の眼には、吾の未だ嘗て見しこと無き特異の表情を認めたり。即ち吾が彼女の顔面に見しものは、吾を脅迫せんずる悲哀を豫知せしむるものゝ如かりき』と。

"On thy wan lip, no cheerful appears;
The lentions face a tender sadness wears;
Placid in pain thou seemxst serene in grief,
As conscious of thy fate, and hoyeless of relief!
Cease, cease, presaging heart! O angels, deign
To bear my fervent prayer, that all my fears
be vain!"

(Woodhouse's translation.)

『あはれ爾が蒼褪めし唇に、樂しき笑は現はれず
爾が美はしき顔には柔しき悲愁の影宿せり、
さはれ苦にも平安に、愁にも靜穩なる爾は、
爾が運命の程をば知りて、救助を望まざる如く
見ゆ！
止めよ、やめよ、來るべき禍知ら其影よ。あゝ
天の使よ、惠を垂れて
吾が衷心の祈禱を聽き、吾が凡ての恐怖を徒爾

ならしめよ。」

然れども彼が心情に蟠る恐怖は眞實であつた。彼女は夢幻に彼に現はれて、再び姿を見給ふこと無かるべしと言ふのであつた。

“That last dark eve, she cries, ‘remember'st thou
When to those doting eyes I bade farewell,
Forced by the time's relentless tyranny?
I had not then the power nor heart to tell
What thou shalt find, alas! too surely true—
Hope not again on earth thy Laura's face to see.”

（Wrangham.s transartion.）

「彼の最後の暗き夕まぐれ」と彼女は叫べり
「記憶へ給ふや休み無き時の非情に强ひられて
愛に溺るゝ人の眼に別を告げし其時を？
告げん力も心も吾有たざりき
軈て見出し給ふ其事を、噫！——眞確かに——
再び此世に爾がラウラの面を見むと思ひな給ひそ。」

「噫悲慘なる恐ろしの幻象よ」と彼は叫びつゝ、其事實を打消さむと努めた。彼は泣きつゝも猶歌ふたのである、然るに今や彼女が死の確報に接した。

“Che fai? che pensi? che piu dietro guardi?”

「何をかなせる？ 何をか思へる？ 何をか回顧せずや？。」

と失望の末彼は此く叫んだ。彼女の眼は彼を神聖に導いた、即ち彼は「思想の羽翼に座して天の御國にと」翺翔したのである。

其後彼の書いたのは、「逝けるラウラに」 “To Laura, Dead” と稱する者である、彼の短詩に神秘主義は愈々發揮され、其文字語句は益々活躍し來つた。彼はブアーヂルを手書した中に、彼女の逝ける年月日を記し傍註を書いて居るが、那は屢々問題を惹起さしめたものである、其中に彼は言つて居る、「此損失は吾をして生存の價値無からしめたり、吾が生涯を縛せる最も强き絆は斷たれり」と。

“She stood within my heart, warm, young, alone,
As in a humble home a lady bright;
By her last flight not merely am I grown
Mortal, but dead, and she an angel quite.”

(Macgregor's translation.)

『彼女は吾が心情の裡に、温く、若やかに、唯ひとり立てり、
开は賤が伏屋に妙なる淑女の住めるごとく、
彼女の靈の天に飛び去りしより、吾が運命は限られしかど、
彼女は天の使となりたりき』。と

是れ實に二十年以上に亘る戀愛、熱情の物語である、其當時に於ても將又其後數世紀に於ても容易に否殆んど見出すことの出來ない、戀愛詩の模型と迄稱へられし詩歌を皷吹したものであつた。其夢幻の如き詩句の音樂的好調は、彼等の喜悅と悲痛とを韻律的に表現せんとする後人の一大典範となつたのである。

ペトラークは結婚をしないで、而も猶二人の子女の父親であつたと聞く時に、彼はラウラに對して不忠實の如うに思はれやう。然れども彼の春の朝、祈禱に跪ける美はしの人の面影には彼の心情も智慧も凡て捉はれて終つたものと思はれる。理想に於ける婦人の中にても、彼女が優秀の地位を占め得る所以は、ペトラークの詩に對する不斷不滅の皷吹者であつたからである。彼女とビアトリスとは、ペトラークがダンテと異つて居る以上に異色のものである、然れども彼女も亦確かに、より以下の天才の人（ペトラークをダンテに比して）の心情を充實せしめ得たる、より以上の理想の婦人（ラウラをビアトリスに較べて）である。彼女が此地步を占め得る所以のものは、ペトラークの心情に愛を皷吹し、开を最後迄燃ゆるが如くに永續せしめたる、彼女の淸淨、尊嚴、純潔『朝の露の滴りの如き』ものあるに由つてゞある。

死後彼女に捧げられし短詩の中に、彼は彼女の美

德を讃した、若し彼女にして彼の煩惱に應ぜしならんか、彼は恐らく彼女の皎潔無垢の精神を汚辱したであらう、と斯く思ひ及ぶ時、彼は慄然として戰きを禁じ得ないのであつた。天の使と、而して又選ばれ祝福されし人々の靈は、ラウラが彼等の中に加はりし其日に於て、必ずや歡んで彼女を迎へたことであらう、而して今や既に彼女は彼を顧て、來り給へよかしと會釋するのであつた。

是れ實に漸次精神的に發展せし地上の戀愛と爭鬪との物語であつて、それに由つてペトラークはラウラの名を不朽不滅のものとなしたのである。

價なしに受けたれば、また價なしに施すべし。　太一〇ノ八

最初のクリスマスの木

ヘンリーバンダイク
河口正子譯

基督降誕後七百二十二年の降誕祭の前日の事である、モゼール川の堤に沿ふて銀の如く煌々と輝いて居る廣闊な雪の牧場、神秘な意味でも持つて居るかのやうな忘れな草が一面に咲き亂れ、燃え立つ樣な金色の夕陽が其東側の傾斜地に長い影を投げて居る嶮阻な山際、其の上を覆ふて居る庇のない然かも幽邃な龍膽樹のアーチ、さては其空中の庭園とも云ふべき小丘の眞中にあつて東には鋼青色に、西には紫紺に輝いて居るファゼルの修道院の壁、何れも皆靜寂の内に眠つて居る。恰かも空も地も其聲をひそめ谷間を縫ふて潺々と流れて居る小川の囁きに耳を澄まして居るかの如く、柔和しい而かも強い知覺を持つて居るやうな沈默が空一ぱいに蔓衍して居る。

其日は終日尼僧達の内にいつもにない不思議な歡

喜に滿ちたどよめきがあつた、而して好奇心と興奮の微風が行廊から靜かな部屋々々に至る迄普く吹き渡つたやうに思はれた。それは有名な一人の訪問者が此修道院を訪れたからである。其訪問者と云ふは英國のウィンフレードで其人の名はラテイン語ではボニフエースと云ひ、人々はかれを獨逸の使徒と呼んで居る。此人は偉大な說教者で、又得難き學者である。然しこれ以上に尙大膽不屈の旅行者で冒險好な巡禮者で且物語りに巧みな僧であつた。彼れはウエセックスにある其の住家を捨て、可成に有福な財産を殘して旅路に上つたのである。ニユートセールの內福豊かな僧院で選抜されて僧院長とまで成つたが、尙此處にも止まる事をしなかつた。又或時はカール王の朝廷で僧正たるの榮職を拒絕した。彼れに滿足を與ゆるものは唯人跡絕へたる森林を徘徊し、又は異邦の地に於て說教をする事であつた。

　ヘセー、ソーリンジヤ等の森を過ぎ、或はサリソネーの境界地に添うて、彼れは數年の間旅をしたのである。此間唯一行數人の者と共に、或時は木の下蔭に夜をあかし、或時は山を越へ沼を渡り、今日は此處、あすは彼處と遊歷して決して安逸と快樂に滿足せず常に困難と危險を愛して居た。

　彼れは一體どんな風采の人であつたゞろうか、寧、眉目淸秀、楚々たる好男子であつた、然し其體格は槍の如く、眞直に樫木細工の如く强硬であつた、其容貌は未だ若く滑かな皮膚は風雨と太陽に晒されて靑銅色を呈して居る。彼が經驗せる冒險談をなす時或は彼が爭つた僞善な僧侶の惡爲などを語る時、其淸く澄んだ、而かも親切の溢れて居る灰色の眼は焰のやうに輝いた。

　彼れは其日如何なる話をしたゞであろう？　靈寶によりて行はれた奇蹟のはなしでもない、又朝廷や議會や莊麗を極めた大聖堂の事でもない、彼れは是等の事を好く熟知しては居たが、然し其の日の彼れが物語は大海を渡り嶮山を攀ぢて彼れが旅行した其長い旅行談であつた。其間に出逢つた火事や大洪水

の話、猛獰な狼や野熊の話、恐ろしい大嵐、寂漠たる森林にあかせし物凄き夜、さて異邦の神々の薄暗き祭壇、其に捧ぐる血腥き犧牲、徘徊せる兇惡なる蠻人の一隊が加へやうとした危難から危く遁れ得た物語りなどであつた。

小さい新參の尼僧達は彼れの周圍に集まつて、彼れの物語に心を奪はれ、口を開いて耳を傾けて居た驚嘆のあまり恍惚として彼等の顔は蒼白となり眼は輝いて居た。又半ば恐怖半ばは喜悅の内に御互ひに腕をまきつけ、或は一所にぴつたりとくつつきあつて居た。老いた尼僧達も又自分等の仕事をやめ、其處を行き過ぎがけに立ちどまつては、此巡禮者の物語に耳を傾けて居た。尼僧達も同じ樣な若かい經驗をもつて居るので、彼れの物語が事實である事は皆好く知り過ぎて居た。即ちある者は其父の家が火災にかゝり其癈墟から立ちのぼる煙を見、或は又遠き未開の地に住んで居る兄弟を持つて居る者もあつた、彼れ等の心は夜となく晝となく其兄弟の下にとび行き、尚生者の内に居るかしらと氣遣つて胸をいためて居た。

然し今は其珍らしい物語に刺激を受けた其の日も終り、夕食の時間は來た、そして修道院の人達は皆食堂にあつまつて居る。食堂の上座には威風堂々たるダゴボート王の姫君で此處修道院の管長たるアドユーラ尼が座つて居る。其紫の下衣、其の上にかけて居る貂の毛皮で緣取つた長い白無垢の法衣、其銀髮の上にかぶつて居る冠の如き雪白のベール、是等は確かに彼の女が王家の出である事を證明して居る。彼の女の右手には當夜の貴賓ウインフレードが座を占め、左手に居るのは、彼の女の孫に當る若いグレゴー親王、丁度學校から歸つたばかりの大柄の男らしい青年である。黑味を帶びた褐色の梁や桷の見へて居る長い影の多い此大廣間には、純白なベールを被り、色白い顔をした尼僧達が二列に並んで食卓に向かつて居る。斜めになつた太陽の光線は窓の頂を通して其の眞紅の光を天井に投げかけ壁の上部を

薄紅に彩つて居る。其の光景は實に一幅の繪の如く美しく、且靜かであつた、それと云ふのは食卓に向つた時、一人の者が其の日の聖書を朗讀して居る間、他の者は皆暫く沈默つてこれを聞いて居ると云ふのが、この修道院の規則であつたからである。

「今日は私の孫の朗讀する番で御座います。」

管長はウインフレードに云つた。

「私共は彼れが學校でどれ丈の事を學んだか見てやりませう。グレゴー其本の中の印の付いて居る處を御讀みなさい。」

青年は自分の席から立つて、其の書物の頁を繰つた、これはラテイレ語で書いてあるゼロメの譯文の聖書で、其々印のある場所と云ふのは、エペソ人に送つた保羅の書簡——かれが正に戰場に出でんとして武具に身をかためてをる兵士としてのクリスト者の用意を描いた一節であつた。生氣にあふれた若々しい聲は朗らかに明瞭な一語々々をまろばして、其章の終りまで淀みなくすら〳〵とよみ終へました。ウイレフレードは微笑みつゝ耳を傾けて居たが、青年が讀み終つた時、

「大層勇ましく讀めましたね、貴殿は今讀まれた事が御解りですか？」

とたづねました。

「ハイ好く解ります、トレペスで先生に敎はつたのですもの、そして私共はこ其書簡は始めから終りまで殆ど暗誦する位ひに讀んで居ります」青年は答へた。やがてこの青年は己れの技倆をみせびらかすかのやうに、頁から顔をそむけて其の節を繰り返し始めた。ウイレンフレードは柔和しく其の手を擧げて彼れが制し、

「そうぢやないのです、私は其積りではありません、私共が祈る時には神樣に御話をして居るのでせう、そして吾々が聖書を讀む時には神が吾々に語り給ふのですよ。私はこの普通の言葉で、神が貴殿に語り給ひし事を聞かれたかどうかを、お尋ねするのです、さあそれで皆の者がよく了解もする事が出來

るやうに英語でもう一度、この武士、其武具、其戰場の一節を云つて下さい。

青年は躊躇した、赤面し、口ごもりました、遂にかれは其聖書をもつてウインフレードの席に行き、

『何卒この書物をとつて下さい、そして私の代りに讀んで下さい、私はこの言葉の響は大變好きですが其意味はよくわかりません。私は宗教、私共の信仰の教義、又私には少しも適してゐませんが、祖母樣は私をそれに仕やうと定めて居らるゝ修道院に於ける僧侶や、尼さん達の生活も知つて居ります。而して又戰の事、兵士や英雄の生活も知つて居ります ボージルや其他昔の著者の本でよみ、又トレベスで兵士達から少しは聞いて居りますから。而して生活が私を大層愛して呉るので、私はこれを經驗して見たいものと望んで居ります。然しどうしてこの二者の生活が適合するか、又聖職にある僧にとつて何故武具が必要であるか、是等が私には判りません、何卒この意味を教へて下さい、若し世界中に是を知つて居る人があるとすれば、それは貴父だと信じます。』

ウインフレードは其の書をとりこれを閉ぢた、而して青年の手を握り、

『皆さんは疲れるといけないから、先に晩の祈禱のため立つて行く事にしませう』と云つた。

僧院長の相圖と共に、嚴かに吟誦された祝禱も美しい聲の囁きも、床の敷物を踏む多くの足の柔和しい足音も、戸の外へ溢れ出た噪音の潮も廊下の彼方へ退き去つた後には、漸く黄昏の幕の下ろされた此部屋に食卓の上座に座して居る唯三人のみが殘された。やがてウインフレードは其勇士の譬を實際の生活にあてはめて説明し始めた。彼れは其形の變る每に、この書面に最適宜に自分自らの經驗より出づる新鮮な光を閃達せしめたのである。而して自己との戰、孤獨の内に爭つた惡靈との爭ひ、或は荒野にあつて幾世紀かの間人々が禮拜した惡魔の話、凄慘な森林に危險を冒して入つた旅人に對し其の人々が

祈つた、恐ろしい祈りなどを語つた。彼れ等は其の恐ろしきものを神々と思つて居た事、又最も古い大木の搖るがない枝の間、或は起伏の多い山中の洞窟などにある彼等の住家の物凄い話、又は駿馬に跨り其敵に向かつて亂投する槍の閃きなどをも語つた。然し是等のものは神ではなく空中に棲める淫猥なる惡靈、暗きを司どる者である事、この靈魔と戰ひ、其忿怒を信仰の楯の下にひしぎ、眞理の劍をもつて彼等を錯愕驚倒せしむる時、其處に榮光と名譽はないか？　勇敢なる男子はこの惡魔に向つて勇往邁進し、これを戰ひ、是を征服するより以上の勇しき冒險を希ふ事が出來るか、などゝ云ふ事をも附け加へた。

『御覧なさい！』とウインフレードは語を改めた。

『今宵の僧院は何んと云ふ美しい平和な有樣でせう是は恰かも冬の最中百花爛漫たる花園の如くいかなる暴風に逢つても搖ぐ事なき大木の枝の間に作られた巣の如く、或は怒濤さかまく海際にあつて尙靜穩な港のやうであります。これが選びを受けて、平靖、祈禱、沈思默考に召された者に對して宗教の意味する處であります。

然し凡ての森は靜けくとも、この廣い森の彼方むこうにをる人々の心中には今宵如何なる嵐があれ狂うて居るか誰が知つて居るでせう？　今宵平和の君の降臨に際し、忿怒と殘忍の巣窟が間近かに有るかも知れない、が誰も之を知る者はない。それでキリストのために挑み、キリストのために戰ひこれがために勝利を得るやうに召されて、選びを蒙りたる者に宗教は如何なる事を意味するか御話ししませう。是は即ち敵の要塞に向つてすゝみ、何處においても主のため其通路を得んとて努力する事であります。救の甲をのぞきて他に此戰のため十分に堅固な甲があるでせうか？　正義の護胸をのぞいて他に其猛惡な投槍に對して人を守まる事の出來る護胸がありますか？　平和なる福音の用意なくして如何なる靴がこの烈しき旅行に堪ゆる事が出來ますか？』

『靴！』とかれは再び叫びました。而して恰かもふと或る考へが浮かんだかの如く高く笑ひました。彼れは其重い牡牛の皮で製した長靴を穿ち、其脛は革紐で括られてある足をつき出した。

『此處を御覽なさい、十字架のため戰ふ者はどんな靴を穿いて居りますか？』私はトリーの監督の長靴を見た事がありますが、其靴は白い野羊の皮で製し絹糸で刺繡が施してあつて、沼地を通つたならば一日で襤褸々々に切れて仕舞ひそうな物でした、又大道を歩むに用ゆる普通の僧の草鞋も見た事があります、――そうです私も穿つて見ました、然し唯一度の旅行で十足も穿き破つて仕舞いました、それで今私は一番頑丈な鐵の樣に強い皮の靴を穿つて居ります。いかなる岩と雖もこれを切る事は出來ません、而かもなほ私はこの靴を一足以上ももう穿きくづして居ります。尙私の旅行が終るまでには、もつと澤山を穿き破る事でせう、そして私は思ふに若し神が私を惡み給ふならばこの靴を穿いて死ぬでせう私は柔軟かい絹布の褥の中で死ぬよりも餘程好いと思ふ、兵士の靴！　獵人の靴、樵夫の靴！　これ等が私の平和なる福音の用意である。サーグレゴー！』と彼れは青年の肩に其茶褐色の手を置いて云つた。

『サー私と共に樵夫の靴を御穿きなさい。これが私共が命ぜられた生涯である。主にあつて強く、惡魔の獵人であり、荒野の征服者であり、又信仰の樵夫とならう、サー御出でなさい』

靑年の目は輝いた、そして彼れは其祖母の方を向いたが、祖母は強く其手を振り、

『いけません、其の樣な荒々しい言葉をもつて私の側から此小供を御奪りになる事は出來ません、私は私の仕事を手傳ひ、私の老い先短い年を慰むるために是非とも此小供が必要なのです。』

『貴女は主が要し給ふよりも以上にこの御子が御入用なのですか？』とフィンフレッドは詰問した。

『そして貴女は弓に出來る木を捲絲竿に御使いになりますか？』

「然し、私は此の子を大變氣遣ふので御座います、貴父の生活はこの子には餘り峻酷で御座います、彼は森の中で飢餓に迫つて死ぬでせう。」

「或る時！」とウインフレードは微笑を湛え乍ら云つた。

「私共はオール川の堤に野宿をした事がありますが其時朝飯のテーブルを用意するにはしたのですが實は食糧が盡きて居たので、皆空だつたのです、それで仕方なく私共は朝飯を食べずに進み多分荒野から出る事の出來る前に飢えて死ぬだらうと思ふて居ました、處が皆かう云つて呟いて居る時、一羽の鶚が翼をばさ／＼動かして、川から飛び立ちましたが其調子にテントの眞中に大きな梭魚を一匹落しました。これが爲充分の食物があつて尚殘つた程でありました。私は未だ曾て正義しき者が見捨てられ、其子孫が生活に困つて居るが如き事は見た事がありません。」

「然し森林中の恐ろしい邪教徒!!」と修道院長は叫びました。

「彼れ等は其矢でこの子を射殺し、其斧で脳を打ち碎くかもしれません、彼れは未だ小供ですから那麼危險や爭闘に當る事は出來ません。」

「年に於ては小供かもしれませんが精神に於てはもう大人です。」とウインフレードは答へた。

「然し若し英雄が戰場に於て夭折するならば彼れは枯れた葉や凋んだ花の冠でなく、眞に輝いた冠を被ぶるでせう。

年老いた王女は戰慄した、そしてグレーゴーを自分の近くに引き寄せ、彼れの茶褐色の髮に柔和しく其手を置き、

「確かにこの子が私を一人殘して行く積りかどうか判りません、且今もう厩には彼れに與へる馬は一匹も居ない、それで彼れは王の孫としての應しい旅行をする事は出來ません。」

グレゴーは眞直ぐに祖母の目を凝視め、

「祖母樣！」と云つた。

「祖母様若しこの神の人と一所に乗る馬を私に下さる事が出來なければ、私はこの方と一所に徒で行きませう。」（未完）

見・聞・想

小公子を見て

神田　山下とめ子

私は此間青年會館で開催された活動寫眞『小公子』を見にまゐりました。活動寫眞といへば成るべく避けるやうにして居た私が、其の催が上毛孤兒院の資金募集であり、且彼の有名なる小說を脚色したものであるといふことですから、見る氣になつてまゐりました。そして私は本當にまゐつたことを幸に且歡ばしく思つたのであります。私は本當にあのセドリックがかはいくて仕方がありません、あのあどけない優しい心が其の周圍の人々に惠の露を與へ、終に其の位地はあつても富はあつても頑硬な心で社會からは無慈悲な老爺として卑められて居た老侯爵をし、凡て生かはつたやうな暖い情ある人に感化したといふ事は、何たる立派なことでせう。殊に寫眞に映るセドリックが其の擧止立居振舞すべてが申分ないのに誰でも泣かずには居られません。私は是非機會を得てもう一度あの活動寫眞を見たいと思つて居ます。

記者曰、活動寫眞『小公子』を御覽になつた方から所感を寄せられた方が幾人かあります、今其の一を揭げましたが、餘は次號に揭げたいと思つて居ます、若し他の右『小公子』を御覽になつた方々からも御所感を御寄稿下さる事ならば共に次號に揭載したいと存じます、敢て諸兄弟の御寄稿を願ひたい。

花の籠

患難の欣喜

木岡莞爾

拙著『信仰と實驗』に揭げた「試煉と祈禱」の記事には、讀者も定めて泣かれし方も多からん。そが『患難にも欣喜を爲せり』てふ、菅野田鶴子姉の事共に付再び禿筆を呵して見やう。

良人菅野德助氏は英文學に造詣深く、十數年前洋行もされ、非常に記憶力と根氣強く、早稻田大學に教授の傍、某書店の大著述にも從事し、それ等過度の勉強に神經衰弱に罹り、摀て丶加へて其書店破產の爲め、財政上にも大打擊を受け、神經衰弱はヒステリーとなり更に昂じて發狂となつた。故鄕石の卷に歸省して加療する事數月東都大久保の腦病院にも入院し、後ち仙臺に移つて不歸の客となられた。此間蒲柳の身の夫人は、良人の看護と財政の切り廻しとに一心不亂。恒に祈禱と信者の同情とをこよなき力とし慰とせられ、全身全靈恩寵に充され感謝に溢れ、實に患難のうちにも欣喜びあり、哀める中にも福を得て居る、信仰生活の模範を示された。

話が遡るが良人洋行の不在中、岐阜の寓居に强盜が押し入つて、數多き衣類什器を殆ど餘す處なく持ち去つた。此夜は不思議にも誰一人目醒る者なく、拂曉漸く之に氣付き、疊には刀の突きさしたる痕跡のあるにぎよつとし、また神の深き恩寵を感謝せられたのであつた。此時見舞に來られた夫人の妹君は云はれた『姉さんは定めし落膽して居られる事と思ふて慰に來たのに』と目を丸くして驚かれ

たさうである。此程妹君は凶報に接して『姉さんは岐阜で强盜の難に會つて感謝され　あのときの信仰を未だに持つて居られるか』と問ひ試みたといふ事であつたが、夫人の信仰はそれ以上に精錬せらつゝある

夫人は良人を仙臺の病院に托せられてから、其費用を償ふ爲め馴れぬ商賣を初められた。女子青年界九卷十一號にも廣告してある通り吳服の卸問屋から直取引をして、極く薄口錢で購買者の便利(二三割も安價)を計り、親切と正實とを資本として活動せられ、女の細腕ながら祈により神の腕にすがり、今は毎月二三千圓の商のあるやうになられた店には何等商品のあるではなし、電話が架つて居るのみで、別に番頭も居ない。自分が注文の品を問屋で撰擇して自分で得意先へ屆ける、もし少しでも氣に向かぬ品があれば、氣に入るまで何度でも取換るといふ其親切と熱心とには誰も驚かぬ者はない此荷物の運搬は俥では不經濟であるから、出來る丈け電車を利用しい、も十貫目以上の反物を自分で負ひ、又乳母車に積んで押して行かるゝのである。雇女は十五圓の月給で女中兼荷物運搬に雇ふが、半年も辛抱する者がない。此れを見ても夫人の努力の一方ならぬ事が分る。大きな荷物を負ふて電車に乘るも亦容易でない。『お荷物があれば込み合て居ます　ら次の電車へ』といふてチン／＼とやられる事が度々ある。婦人の身で重い荷物を負ふのは隨分きついには違ひない。しかし今は男子にも劣らぬ力が出て不思議な程健康である。食事の不規則睡眠の不足でさへ別段身體にも障らぬ。其れよりはもつとつらかつたのは問屋の取引であつたさうである。素人でしかも女商人、番頭等の評判では三月とは續くまいとて、面倒といはぬばかりのあしらひ、一時間以上も待たす事がある。それはまだしも問屋の習慣として値段をきめるのには、双方殆ど喧嘩のやうに爭ふて終にシャン／＼シャン、掛聲で手を打つのである。こんな眞似はとても夫人には出來ない。番頭の云ひ値で買て來るといふ譯であつたから、初めの内は少々割の高いものを買はされたに違ひない。番頭も此頃は『菅野さんには是非一錢も値切られた事がない、斯ういふ方に高く賣れば罰が當る』といふて居る。或る日の事市内の吳服店の女主人が買物に來た。中々の男勝りで花々しい商戰を終つたが、番頭は菅野夫人に囁いて『菅野さんあゝ出ればこつちも敗けては居らぬ、貴方の値段よりは高いでせう』と舌を出した。結句正直で懸引のない夫人の方が勝利なのである。商賣を初めて一二月の後、他人から斯ういふ注意を受けた事があつた『菅野さん番頭を料理屋へ招いて酒と藝者で御機嫌を取られねばとても駄目です』と之が從來商人仲間の習慣なのである。夫人は『宜敷いやります』と答へて、爾來番頭には聖籍を贈物として惡習慣の打破につとめられた。此程ある番頭が『菅野さ　にお禮を云はねばならぬ』といつた。何事かと問へば『お蔭で昇級しました』と答へたのである。其譯は斯うであつた、一般に商人の恒として一萬圓の取引があつても、やつと千圓位しか入金がない。夫人は金額の多少に拘はらず、月末になれば必ず問屋へ仕拂に行く、此不景氣の時節にこんな好い得意があつたものでない。今は菅野さん／＼と下へも置かぬ待遇になつた。又一軒の問屋へ行けば他の問屋から『お歸りにお立寄り下さい』と電話が架つて來る位である。此程問屋から記帳方の女店員を雇ひたいと賴まれ、人撰して二名周旋されたが、成績極めて好良との事であつた。夫人の今日ある事を顧みれば信者であつてこそ斯く成功せられたに違ひない。殊に我國の行燈式商業に、基督教の眞の光を輝す使命を實現せられつゝある事を喜び、又祈らねばならぬ。讀者よ夫人の事業を援助せられよ。(菅野田鶴子姉住所東京麹町區飯田町六丁目十三)

少年少女
二人の天使と籠

或時、二人の天使が、手に〳〵籠を以て、天から出かけました、地上の人の、お祈りと感謝とを集める爲に。

一人はお祈禱を、一人は感謝を持つて來ませうと云ふことで御座いました。お祈禱の天使は、大きな籠を持つてゆきました。天使は、澤山の人達が、困つて居るのを助けて下さるやうに、善いものを下さるやうにと、神樣にお祈りをして居ることを知つて居りましたから、けれども感謝の天使は、もつと大きな籠を持つていきました。それは、人々は神樣に隨分澤山のものをお願ひして居りますけれども、神樣は、人々が考へつきもせず、願ひもしないものを澤山、いつも下さつていらつしやるのを知つて居りましたから。そこで、この天使は、それほど澤山のよい頂戴ものゝ爲に、誰も彼もみんな、神樣にあげさうな感謝を容れるには、もつと大きな籠が要るだらうと思ひました。

皆さんはどうお考へになりますか。少くともお祈りと同じ數位の感謝があつたとはお思ひになりませんか、誰でも他所から物を頂けば、下さつた方に、丁寧に『ありがたう御座います』と申しますもの。それなのに、神樣にお願ひをして、いつもお願ひしたより澤山頂きながら、神樣にお禮を申上ないと云ふのは、何と不思議では御座いませんか。

一寸考へて見ませう。神樣は、私達が願ひますよりも、澤山もつと善いものを下さるのは眞實では御座いませんか。私共は今朝の光明の爲、太陽が又のぼります樣にと、昨晩お祈りを致しましたらうか。よく眠れます樣にとお祈り致しましたらうか。眼が醒めてから、見たり、聞いたり、走けたり、お話したりすることが出來ます樣にと、お祈り致しましたらうか。私達はかう云ふ事をお願ひ致しませんでした。それなのに神樣は、私達にさう云ふものや、又お願ひしたこともない、澤山のもつと善い物を下さ

います。

ですから、感謝の天使が、も一人の天使が、お祈を集める爲にと、持つて行つたのよりも感謝を入れる爲に、もつと大きな籠を持つて居たのは、全くあたり前の事でした。この天使は人々がお祈りを聽いて頂い爲に感謝ばかりでなく、人々は少ともお願ひ致しませんけれども、神樣がいつも下さる、それはそれは美しいなつかしい多くの頂戴物の爲にも感謝をさゝげて居ることゝ、思ひ込んで居りました。

けれども、何うで御座いましたらう。お祈りの天使は、一ぱい溢れ出さうな籠を持つて歸つて來ましたのに、まあ、感謝の天使は、籠にほんの少しばかりしかもつて參りませんとは、なんと情ない、恥かしいことでは御座いませんか。御なつかしい神樣は感謝をしない人にまでも、いつも下さつていらつしやいます。けれどきつと悲しく思し召していらつしやるに異ひ御座いません。

少供諸君、私達は、感謝の天使が、神樣私達へのうれしい頂戴物の爲に、神樣への感謝をとりに參ります。その天使を悲しませたくないもので御座います。（松榮譯）

和歌

辻村靖子

○人世

蜘蛛の爲にしめからまれていきもやらず死にせぬ蟬のはばたきあはれ

○讀書

蒼鷹の子雀ねらふまなこもてみよや我友書かし向はば

○波荒き日海岸にたちて

灰色のみ空を洗ふたつ濤のかなたの島に我子あるらむか

○我が子豆南の諸島にいでたゝとするころ梧桐の葉こしに三日月のきらめくをみて

この月のまどかならむときみくらしま荒磯にたちていへを戀ふらし

○火山島

天とぶや鳥のもてきて沖のしま燒すな原に米つゝじさく

○不　二

魔の軍ひづめならべて去る雲のはるればみゆる不二の神山

○基督教（月は眞理 水は宗教）

寺西臺助

月には見て手にはとられぬ月影をむすぶうれしき庭の眞清水

○星

天にます神のかざしの花ならむそら羅にきらめくある星の影

○天

とこしへの春にやあるらむ天の原よそときじくに星の花さく

聖書研究

以賽亞書

牧師　横田貞治

第三回以賽亞書

附　人の神に對する態度

舊約に於ける預言者は社會改良を叫び國家改善を喃々する所の一個の社會主義者一邊の熱烈なる愛國者の如きである然しながら深く彼等を研究する時に彼等は只一個の社會主義者でもなければ又一邊の愛國者でもない彼等に確かにそう云ふ點はあるが其出發點は常に社會よりも神である。先づ神に對する觀念を明かにし而して後に國家社會を如何にして此の神の意に協ふべきものとなすべきやに苦心したのである、國家の進歩社會の改善の爲めに神を引き來つたのではない、神の爲めに國家の進歩社會の改善を

如何にすべきかに焦慮したのである。此間同じ様であるが大に異なる所がある、社會的道德の腐敗墮落を憤りて一意其の改革を怒號せし預言者アモス社會道德はこれ宗教なりとまで論ぜるかの如き彼れでさへ只正義人道の念が彼の預言の出發點ではない、實に「獅子吼ゆ誰か懼れざらんか、主エホバ言語たまふ誰か預言せざらんか」砂漠にエホバの怒れる正義の聲を聞いて立つたのである。故に預言者の精神を知らんに先づ其の神に對する觀念を知らざるべからず、之がイザヤの預言的觀念を知るに其六章の神の幻象が如何に大切なるかを見る所以である。

　神に對する讃辭に聖なる哉聖なる哉のセラピムの聲を聞く。之れ實にイザヤの神に對する觀念である

○此の聖と云ふ觀念に普通民衆の考へ居るものと預言者の其れと大に異なる所がある。普通民衆には預言者の如く道德的意味を有して居らぬ。神道などで云ふ聖と聖と餘りかはらぬ様である。此聖とは元分離と云ふ意味から來たのであらふと云ふが夫れ或は然からん。一種接近禁制物である俗人がエホバの櫃に觸て死ぬるとか、エホバの櫃が敵國にとられし所其處に疫病起つたとか或はエホバの面を見るものは死ぬと云ふ様な何等其處に道德的の所はない。只恐るべき犯し難ひ近くべからざるものであるかの様である。此の民衆の觀念は決してイザヤに無くはない、却つてもつと大きくされ意味深くせられて更に新らしき意味も加へらる。其處で、

(一)神は獨一無比である、近くべからざる恐るべき神なり此神を見て『あゝ禍なる哉我亡びなん――我目萬軍のエホバに在ます王を見まつれば也』見ゆは實に彼に取りて愉快なりし事にあらずして寧ろ恐ろしかりしなり。之は實にイザヤをして神の絶大なる事、近き難き畏るべき莊嚴無比獨一の神なる事を益々明かにせしめたのである。此神と人とを比較して後者の力弱くあはれむべきものなるを語り、前者のいやが上に力ある實在なるを語つて居る。六章の始めに於てウジヤ王と比較したのも其れであらふ。人

の運命は墓である神の御座は永遠に天にある、或は二十七—『此日に高ぶる者はかゞめられ驕る人は低くせられ唯エホバのみ高くあげられ給はん……汝等鼻より息のいでいりする人に倚る事をやめよ、斯るものは何んぞ數ふるに足らん』此の神と偶像と比較して後者は『おのが手の工その指のつくれる者』(二八)と『唯エホバのみ高くあげられ給はん、かくて偶像はこと〳〵く亡びうすべし』(二十八)—『其日人己が拜せんとて造れる白銀の偶像と黃金の偶像とを鼹鼠の穴、蝙蝠の穴になげすて、岩々の隙、けはしき山峽に入りエホバの起て地をふるひうごかしたまふ、其畏るべき容貌と稜威のかゞやきとを避ん。』生けるエホバの怒の前に偶像は人によつてさへなげ捨てらるべきものである。更に進んで超人的のセラビムさへ神の前には其翼を以て顔を蓋ひ足をかくす而かして『聖なる哉〳〵〳〵萬軍のエホバ其榮光は全地に滿つ』と歌はざるを得ない。かくイザヤに於て神の絕對無比、近き難き點を高調して居るが、民衆より更に一歩を進めて國家的精神より世界的になりつゝある。元より全く國家的羈絆より脫する事は如何なる預言者にもなきも預言者はアモスに初まりて漸く神は單に此一小國地の神でない世界の上にある神である事を高調するに至つた。之れ確かに民衆より一歩を進めたる所、イザヤに於て神は是れ絕對の君、世界の支配者、王の王、萬軍のエホバ、獨一無比の神である。

(二)而かして聖なる神と云ふ觀念に更に一段進めたる意味を含まするに至つた即ち道德的意味に於て聖なりと云ふ事である只に大なる神、力の神、或は只に軍の猛き神、近き難き神にあらずして義なる神なり。五〇十六に『されど萬軍のエホバは公平によりてあがめられ、聖なる神は正義によりて聖とせられ給ふべし。』正義一點犯かすべからず罪は彼れと全然相許れず。イザヤも神を見て禍なる哉と叫びし最大の理由は自らが穢れたる脣の民のなかにすめる穢れたる脣の者であつて聖なる神を見しが故とありしは先

に學びし所である。而して罪に對して何處までも刑罰を下さねば止まぬ『エホバ曰ひ給はく汝往きて此民にかくの如く告げよ汝等聞きてきけよ、然れとさとらざるべし、見てみよ然ど知らざるべしとなんぢ此民の心を鈍くし其耳をものうくし其眼を蓋へ、恐らくは其の眼にて見其の耳にてきゝ其心にてさとり翻りて醫さるゝことあらん。』とは既に六章に於て見し所『主いつまで如此あらんか』の問に對し『邑は荒すたれ住ひもなく家に人なく邦悉く荒土となり人々エホバに遠方まで移され廢りたる所國中に多くならん時まで如此あるべし』一歩も罪人に對して妥協の道を見出ださないエホバは決して其民につくす所なかつたのではない恰かも農夫が葡萄園をすきかへし、石をのぞき、よき葡萄を植へ其中に堅樓を立て又酒搾を堀り用意周到至れり盡くせりにて此の民の爲に盡したのであるが結びしものは野葡萄である、『さればエルサレムに住めるものとユダの人よ請ふ汝等我とわが葡萄園とをさばけ。』義なるエホバは決して慘酷ではない、罰するか寧ろ道理にかなつて居るのである『わが葡萄園にわれの作たるほか何のなすべき事ありや、我はよき葡萄の結ぶを望み待ちしに、何なれば野葡萄をむすびしや、然らばわが葡萄園になさんとすることを汝等につげん我は葡萄園の籬色を取去りて其の食あらざるにまかせその垣をこぼちて其踐あらざるにまかせん、我これを荒して再び剪むことをせず耕すことをせず棘と荆とははえいでしめん、また雲に命せて其上に雨ふることなからしめん。』義なる神が此の不義なる民を罰する事元より然り更に五章に於ては禍なる哉と言ひ、書きつらねて不義を好み給はざる神の性格を明かして居り廿五節以下に於て此神は怒の神であることを語つて居る。『この故にエホバその民にむかひて怒をはなち御手をのべて彼等を撃たまへり、山はふるひうごき彼等の屍は衢の中にて糞土のごとくなれり然はあれどエホバの怒やまずして尚其手を伸し給ふ』一寸序に云ふ此五章廿五以下の預言は九八―十四に屬する

預言であるとする則ち九八―十四の北イスラエルの滅亡に對する預言の結論が五廿五節以下なりとす其重なる理由は『エホバの怒やまずして尙其の手をのばし給ふと云ふ繰返句があるからである、確かに兩者離すことを得ざる預言であると云ふがチエーネの說が穩當であらふ即ちイザヤが九八―十四に屬する所の此の預言を殊更に此處に持ち來りて入れしなりと即ち九八―十四の北イスラエルの預言にも屬す。又此處の南ユダの豫言にも屬すとす、何れにしてもイザヤは神は其怒の手を延ばして一度ならず其民を打ち給ふものなるを確かめしなり○神が怒ると云ふ事は何んだか神らしくなく感ぜらるゝ人もあるが神は無念無想でない基督敎の神は人格的の神である以上、感情を具備されて居るは明かである故に不義に對して怒る之れ確かに今日といへど我等が信ずるを得る所のものである。

(三)かく獨一無比の神は其御座は高く天にあれど又低く地に滿ち給ふ神である事は元よりである「我高くあがれる御座にエホバの座し給ふを見しに……其衣裾は殿に滿ちたり』とあり或はセラピムの語に『聖なる哉〳〵〳〵萬軍のエホバ其榮光は全地にみつ』とあり、此の大なる神はシオンの山に住み給ふ神である(例八十八)と云ふのは彼の信仰である。故に此民は亡ぶる事ありといへど、シオンはつひに神の榮を以て輝かなければならないと云ふ事に思ひ至らざるを得なかつた。『斯てわが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからんとは水の海をおほへるごとくエホバの知識地にみつべければなり。』(十一○九)聖山とはシオンである或はシオンは公平を以てあがなはれ歸來るものは正義をもて贖はるべし』(一○廿七)將來の希望も實は此シオン又エホバの住み給ふの深き觀念より來りしを見て差支へなかるべし。而して又全地も神の攝理の手によりて動ける大なる舞臺である、決して神は世界の出來事に超越たるにあらず、寧ろ世界の出來事は彼の指導にあり、されば イザヤは異國アッスリヤの帝王を以て寧ろ神

の審判の道具と指す『咄よアッスリヤ人よ汝はわが怒の杖なり』(十五)されどアッスリア其本分を忘れて兇暴之こと〻するに於て十〇十二『この故に主いひたまふ我シオンの山とエルサレムとに爲さんとする事を悉く遂おはらんとき我アッスリアの王のおごれる心の實と其高ぶり働きたる眼とを罰すべし』イザヤ彼れが更に諸外國につひて豫言する所あるは神彼れが全世界を指導しつ〻あるを示すかく神は高く世を超越して居るが、又低く世の内に狹き所に滿ちて之を支配し指導しつ〻あり。

(四)聖なる神は單に罪を怒り只禍を下すと云ふ方面のみてはない愛無からざるを得ない。彼はアモスの如く正義嚴格なる神を主張せしと同時に、ホゼアの高調せし慈愛の點を忘れなかつた。即ち聖き神は其愛を以て此國民を指導せしなるも其の罪の故に罰せざるを得なかつたのであるが、後には又必ず罪人の罪を聖め給ふのである即ち聖なる神はきよめ給ふ神なり愛なり。かくイザヤが己と社會の罪を感じて只管禍なる哉と叫んで居つた時に『かのセラピムのひとり鉗を以て壇の上より取りたる熱炭を手に携て我に飛び來り吾が口に觸れて曰けるは視よこの火汝の唇にふれたれば既に汝の惡は除かれ汝の罪はきよめられたり』と之れ實に神の愛に基くに外ならず或は一(一ー八)には『汝等の罪は緋の如くなるも雪の如く白くなり紅のごとく赤くとも羊の毛のごとくならん』とある。元より此文章には少しく疑ひあり、或は疑問を略して反語に取る方がよいかも知れぬが十九節には『若汝等肯ひしたがはゞ地の美産をくらふことを得べし』其慈愛あるは之よりである刑罰も畢竟するに慈愛と云つてよい、かくして悔改を促がして居るのは明かであるからである又此の刑罰の後に聖裔のこりてこの地の根となるべし彼のテレビント又は樫樹がきらる〻事ありとも其の根の殘るが如し。』殘有者歸らんと信ずるを得しもの實に神の愛を信じたからである、或は之を救の神と稱す。(十七十)將來の希望は更にメシヤの出現の信仰となりし

所以のもの『今くるしみを受れども後には闇なかるべし。昔はゼブルンの地ナフタリの地をあなどられしめ給ひしかど後には海にそひたる地ヨルダンの外國の地にすめる者のうへに光てらせり……』云々、九章以下は是である。

以上イザヤに於て見る神の觀念ならば元より彼の思想は机上の議論でない故に決して組織を立てゝ感じて居るのではない、理論上矛盾の點もあらふ、說明不備の所もある。然かしながら生ける神である、故に彼の全生涯を動かすの力があるのである、イザヤは彼を又力となし磐(十七十)と云ふ眞に賴むべきものは彼れを措いて、何にか求めん彼れ必ずしもいつも幻象となつて顯はれず見えざるものであるされど見ゆる物質界より更に實在であり更に力を與ふ彼を『ゆるやかに流るゝシロアの水』(八六)に喩ふシロアの水はエルサレムの地下を流るゝの水、其流ゆるやかにして見へずされど、不斷にエルサレムの民の生命を濕じつゝあり神はかく其民に不斷生命を充實せしむ。此神に對して其の民のとるべき態度は如何。イザヤは之を謙遜なる信賴と心よりの服從なりとしてをる。若汝等信ぜずば必ず立ことを得じ』『七九)『われシオンに二つの石をすゑて其基となせり…………これに依賴むものはあわつることなし』(二十八〇六十)『なんじら立かへりて靜かにせば救を得平穩にして依賴ならば力をうべしと三十〇十五)、次に『若し汝等背ひしたがはゞ地の美產をくらふことを得べし』(一〇十九)或は二十九十三に於て心よりの服從を要求して居るイザヤは信仰の預言者と云はる。實に然り謙遜なる信賴と心よりの服從之れ彼れの神に對する態度であるからである、然かしてイザヤは預言者中にても白眉といはるべき天才である、然かも此人にして此點を力說せし所意味深きものあるを感ず。ウジア王の死し時高御座にエホバの座し給ふを見し又偶然ではない其處で罪惡とは何にかと云ふに以上の精神に反する所のもの乃ち不信と剛慢である之れを三種に分ち、

(一)宗教的にいへば獨一の神エホバに信頼せず之を心より敬まはず又征はずして自然に頼り偶像に倚り巫女魔術者に信頼するが如き事然より(一二十九)『なんじらは其喜びたる橿樹によりて恥をいたゞき其選びたる園によりてはぢあからむべし』橿樹、園 自然を禮拜する宗教は立ちたり、木や森を神聖のものとして拜するはカナン宗教の遺習なり)二八、二十(偶像八十九(もし人汝等につげて巫女及魔術者のさへづるが如く細語がごとき者にもとめよといはゞ民はおのれの神にもとむべきにあらずや、いかで語者のために死者にもとむることを爲せんといへ)二十八十五(陰府と契約を結ぶ多分死靈をよぶことならん)此等は實にエホバを信頼せざる行爲である一方エホバを信じて居つて他より斯の如き事をなすと云ふのはいつの世にも人間の弱點である。又エホバを禮拜してから心惡たれくらみて只儀式的にエホバを禮拜する事はあらずもがな、よりも寧ろ罪惡である。一十一『エホバ言たまはく汝等が献ぐる多の犠牲はわれに何の益あらんや我は、をひつじの燔祭と肥へたるけものゝ膏とにあけり……なんぢらは我に見えんとて來ることを誰が汝等に要めしや徒らにわが庭をふむのみなり、空しき祭物は再び携ふる勿れ燻物はわが惡むところ新月及安息日又會衆をよびあつむることも我が惡むところなり、汝等は聖會に惡を兼ね、われ容すにたへず』或は口先きの祈りか何にかせん『この民は口を以て我につかづき口唇をもてわれを敬へども其心は我に遠かれり其われを畏み恐るゝは人の誡命によりてをしへられしのみ』(二十九十三)語多からずともまことに謙遜なるくだけたる魂は神の尊び給ふ所である。イザヤ自身我が神の聖めを受けし例を見よ、剛慢なるパリサイ人の長き祈よりも税吏の胸をうちたる悲觀の祈が神に嘉みせらるゝと一樣なり。

(二)道徳上にいへば神の聖き御旨に服從せずして社會的罪惡を犯かす事、三章十六ー當時のエルサレムの婦人の華美の有樣を語つて居る(十八以下を讀み

上げよ）かゝる奢れる飾りをすて「シオンの女等はおごり（高ぶるの義）頭のばしてあるき（如何に其の高慢之れ見よかしを見よ）眼にて媚をおくり徐々として小股に歩みゆく其の足にはりん〳〵と音をし（之れ足くびに金銀の鈴が飾つてあつて其れを鎖で結びつゝ鈴も音し鎖もなる又小刻に歩くより外なし今にして滑稽であるか一體虛飾など云ふものは滑稽なものである）かくの如き奢飾は神を蔑視せるなり。或はエホバのみわざを顧みずして徒らに領樂にふけるが如き（五十一—二十二、）或は己が權力に委かせて横領するが如き（五八）或はエホバを嘲ける者（十七）殺人（一廿一）歷政（三十五）僞（五十八—）乃ち彼等エホバを恐れずして『惡をよびて善くし善をよびて惡とし暗を以て光とし光をもて暗とし苦をもて甘とし甘をもて苦とする者なり』或は不義の行爲（十一、二、一廿三、五廿三、）等。

（三）政治的にいへば神に信賴し神の言に服從するを忘れて、只己が力にのみ賴より或は無邪の助力のみをのぞむ例、七章に上の池の樋口にアハズが只敵に備ふる事にのみ吸々として神を信ぜざりしは其一例である。或は單に富國强兵を以て國の基礎となすが如き（二八）或は己の力を誇れるが如き『瓦くづるゝとも我等碓石を以て建、柔の木切らるるとも我等香桐をもて之れにかへん』と（九十）或は神を仰望まず之を顧みずして備ふる事（二十二八—十二）或は三十章十五に『主エホバイスラエルの聖者かくいひたまへり汝等たちかへりて靜にせば救を得、平穩にして依賴まば力をうべしと、然ど汝等この事をこのまざりき汝等反りていへり否我等馬にのりて逃走らんとこの故に汝等逃去らん又いへり我等疾きものに乘んとこの故に汝等を追ふもの疾かるべし。』或は異邦にたよる事『彼等わが口にとはずして埃及に下りゆきパロの力をかりておのれを强くし埃及の蔭によらん』されど之れ返つて彼等の恥となる事を知らない（三十一、二、三、三十一、）此等實に今日我等の大に學ばねばならぬ所である。我等は眞に神に謙遜なる思ひ

もて信賴し、只之に心より服從し如何なる他の勢力に動搖せられざるものあるを要す、信仰はイザヤの時よりも更に現代に於て缺乏しつゝある處のものである。

彙報

●東京基督教女子青年會　十一月十四日午後二時より會館內集會場にて、御卽位奉賀式を擧行し、併せて當日は萬國キリスト教女子青年會祈禱週第一日に相當するを以て祈禱會をも開催せり。奏樂讃美（三七三）聖書朗讀、祈禱、奉祝の辭――牧師海老名彈正夫人、祈禱森田松榮女史、國歌二唱にて奉賀式を終り引きつゞき祈禱會に移る。祈禱週の主意に就き司會者より說明ありて後、植村環女史の『祈禱の力』と云ふ題にて御感話あり、讃美（一三八）をうたひ、會衆より二三名の熱心なる祈禱ありて閉會す。出席者百五十名餘にして、有益にして力ある集會なりき。

●青山女學院女子青年會　秋の平和なる一週間も無事に祈禱の中に終ることが出來ました一週間は殊、神樣より祝されたやうによい御天氣で殊に幸で御座いました。當院では午前八時より八時半まで

半時間の極短い時間を祈禱の時間と致しました。月曜日は讃美歌第三番をもつて始め犬塚姉の司會の下に主意書に從つて祈りました。火曜日には休日のため殘念ながら出來ませんでした、水曜日は飛田姉の司會で讃美歌三百二十番をうたひキリストの全人類に對する愛の深き事につきて御感話を伺ひました、木曜日は內村姉の御指導で一五九、一五三等の二つの讃美歌を以て開會し六人のものが祈る事が出來ました、金曜日は柴田先生の司會で讃美歌は一七九番と二六三番を歌ひました主意書にもとづいて五人のものが祈禱を致しました、土曜日と金曜日が一番祈る時間が多かつたやうに思はれます、會員一同の熱心なる祈りによつて世界の人々が一日も早く神樣の國を認める事を信じます。

●**梅花保姆傳習所青年會**　當會も相變らず微々たる者ながら各々の本分を全うせんが爲に力を盡し居り候まゝ御休神被下度候、過日御送附被下候祈禱週の目錄まさに受納仕候、先日振替にて會員二十二名に對し負擔金御送り申候、扨て祈禱週間は每日目錄にならひて日曜日は當會の祈禱日に候へば特別祈り會を開きて祈り申候、尙月曜日より土曜日迄は會員各々が朝夕の祈に加へ又朝の禮拜の折には其日の司會者は代表としてこれを守りかくの如くにして此週を終へ申候會員一同は此の世界的なる祈禱に對しこれに與ふる事を得しを衷心喜び候と共に全國青年會員が所は異にしても一つ思ひをもつて神樣の御前に祈る事を思ひ確かに神樣の御答を期して非常に愉快に感じ申候、當會にては此の度又新に聖書研究會を立てて會友の親しみを增し一つは信仰を堅うせん爲に一の有益なる書籍を購ひ一ヶ月に再度の日曜日を撰びて讀む事といたし申候、尙又當會員は多は宗敎學校にて養成されし學生のみに候へば此の度は此の町の人々をして此の會を認むる樣に僅かの靑年女子の數名を招きて靑年會の紹介をし將來此の人々を會員たらしめんとして一ヶ月に一度の集會を相催し申候今共順序の大略申上候、十月二十三日

土曜日に最初の集會を幼稚園に於て開催いたし候
最初に讃美三百二十二を合唱し副會長の聖書（コリント前書十三章）の朗讀及び祈あり次に會長の世界的女子青年會の紹介ありて後に會員の讃美歌合唱終りて上野先生の聖書の御話ありて二百四十六を歌ひ一先づ閉會す其後は種々の遊びに時の移るも忘れて樂しむ右の通りに御座候へ共最初の會としては思の外に有望なるものに出て迎へられし人々も當會に少しく興味をもたれし樣に見受けられ誠にうれしく神樣に直に感謝致し申候、何卒此の人々をして眞に主の御教のうちに入れられ會員となるゝ爲めに皆樣の厚な御祈のたしに御加へ下されん事を切に御願ひ申上候。

●女子英學塾青年會　今學期からは委員會を一ケ月に一度宛開き此會では主に議事のみを致して居ります、これ丈では委員共は滿足が出來ません、委員共は凡ての方面に青年會が無意味に終るを好まず、會員をして一層宗教に對する興味を持たせるにはまづ委員自らが信仰に燃えなくてはならない、即ち神の愛キリスト教の眞意、信仰を燃えつかせるための火とならなければならない、これには是非祈の必要がある、靜かに神と交らなればならないといふ動機から毎週水曜短い時間ではありますが十二時半から一時迄祈禱會を催して居ります。そしてこゝでは信仰上の談話を交換したり、感話をしたり祈つたりして居ります。また熊本癩病病院の爲め、青年會本部並に一般青年會の爲めに祈るため集會を二度開いて居ります、これには有志者が出席する事になつて居ります、私共は毎日〱忙しい學科にのみ追はれて動もすれば靈の事については忘れ勝てあり、又去る四日には講演會を開きまして三谷民子先生の御話を伺ひました。一同大に感じて深い印象を與へられました其のお話の題は『聖書に現はれたる二人の女性（バシルとエステル）』で御座いましたが、今其の大略を申上ますれば

バシルといふ女は第一婦人になくてはならぬ美を有し其上に血統

もよければ門閥でもあり富を有してゐる。エステルの方は爵も位もなければ富もない境遇である然しイスラエルの古い神を畏るゝ靈を有して居つた何といふ天地の差でせう。二人を比較する時女子大學建設の問題の聲高くなりました今日一體日本の婦人社會を考へるならば如何でせう。彼等に對する適當な言葉はないが、まあ Will と云つた方が適切であらう、フランス革命の時ギロテインで殺される人々を編物をしながら平氣で見て居つた婦人連も彼等の要求する所は知つて居つたが日本婦人はそれを知らない。エステルの有して居つたものを持つて居ない、智惠がいくらあつても說明する事の出來ないものを持つて居ない。誠にそれのないつまらない人間である……人間は失敗する事が一番大切である、それがなければ煩悶はない、それがあつてだん〳〵と向上するのである。人が見てゐないと思ふ所のものを私に有する。即ち永世にのびて行く時が神にあづけてある。今の若い婦人は永遠にのびて行かないから Will になるのである。故に私共は永遠に〳〵のびて行く事を要求しやうではありませんか？　要求する事が人間の價値であるそしてその要求しても永遠に拒ばまれないのは父の家である、それは學問などではとても說明する事はむづかしいのである、世の中にある父子の愛は天にある父の愛の幾分を表にしてゐる。キリストは非常に迫められ給ひし時「人なき所にて祈れと」御仰せられた、私共は靜かに一日一度なりまたは一週に一度なり議論もしないで引さがつて父と話し父の家に行くやうに務めたいものである、よし私共は何も欲しくないがそこにゐたい、又ゐて欲しいと思ふ時がある即ち何か不滿に思ふ時があるこれが即ち靈の渴望である、この時に或人は親しき友と語つたりまた或人は芝居に行つたり、酒を飮んだりして居るがどうか不滿に感じた時行くべき父の家ある事を思出して欲しい、どうかな事を止めてとべきもの、行くべき所をよく知り、命かけてもとるべきものをとり、エステルの如き女となつて頂き度い、惠を蓄て頂きたいそして父の家に行つて頂きたい品性に困つてる時父の家ある事を思出して頂き度い。私が渴望してるたら私共の側にもそれと同樣に感じて居る人があるその人達にも自分が欲するところの事を與へまた尋ねて頂き度いのである。

●共立女學校青年會

萬國祈禱週は其の消息第一日（十四日日曜日）共立女學校に於て聯合祈禱會を相開き申し候、フエリス、捜眞共立神學校及び共立女學校の諸學校より、又橫濱市の青年會よりと併せて百餘名の姉妹方御來會下され候、フエリス女學校の河村とわ子姉御司會の下に、三谷民子女史の適當なる、御講演之あり、數名の諸妹の熱心なる祈禱をもつて會を閉ぢ申候、實に美しき集會に御座候ひき。第二日目よりは每朝始業前に有志のもののみ集りて主題の下に祈禱を捧げ申候。今秋に於ける新らしい一つの働きをお知らせ致し度う存じます。それは此御大典に際し青年會員一同何か記念事業が致し度いと思つて居りました處、會員各々が下級生一

人々を受持つて個人傳道を致す事に定めました、そして出來るならば御大典の日曜日に洗禮を受けられるやうになし度いと定めました、それは十月の始りで御座いました。何しろ經驗もない力もない者の事故隨分苦しい思ひを致しました、涙を流した事も度々で御座いました。然し御喜び下さいまし、七日の日曜には二十三名の方々が御救いに入られました感謝の極みで御座います、御大典紀念として成功しなかつた者も御座います、然し今度は時を定めて力を盡して其方々のために力めて居ります。來る二十五日には例年の通り感謝祭をいたします最早準備も大分整ひました、今年は八十名の貧民を賑はす筈で御座います、是等を御祈りの内に御覺え下されば嬉しく存じます。(稻沼須磨子報)

消息

○小林[illegible]子　十二月二日森久保善太郎氏と番町教會に於て結婚式を擧げらる。

○五味きく子　今回文部省中等教員英語科檢定試驗に目出度合格十一月十五日大阪梅花女學校へ赴任。

○長谷川喜多子　十一月下旬傳道應援のため臺灣に赴かる。

○ミス、テーラー　永らく母君と共に本部に滯在中なりしが十一月二十日歸米の途に上らる。

○ミス、スミス(支那上海女子青年會總幹事)　歸任の途次本部に立寄らる。

○ミス、リーヤー(シンガポール女子青年會幹事)　赴任の途次ミススミス外一名と共に本部に立よらる。

○津田梅子(本會中央委員)　今回教育事業に對する永年の功勞により勳六等寶冠章を授けらる、本會は同姉に對し滿腔の祝意を表す。

○會友申込　(本部報告)

(普通)　高橋久與　福永千代　正木ハル
和田長子　伊藤らん

○會友會費領收　(本部報告)

金壹圓也
高橋久與(大正四ノ十二—五ノ十二)　伊藤らん(　　)
福永千代(大正四ノ十一—五ノ十)　正木ハル(大正四ノ十一—五ノ十)
和田長子(大正五ノ二—六ノ一)
金貳圓也

小原湘子（大正三ノ十二—四ノ二）湯田きみの（大正四ノ二—五ノ一）
ミス、ケギー（大正四ノ六—五ノ五）

○雜誌「女子青年界」代金領收

金七拾錢也
古谷さえ（大正四ノ二—五ノ十）毛利千代（大正四ノ二—五ノ十）
加藤てい（大正四ノ八—五ノ七）堅川留代（大正四ノ九—五ノ八）
杉村勇子（大正四ノ十—五ノ九）鳥倉たつゑ（大正四ノ一—四ノ三）
安東靜子（大正四ノ二—五ノ十）松井勝子（大正四ノ九—五ノ八）
松井蔦子（大正四ノ三—五ノ二）岩崎しん（大正四ノ七—五ノ六）
佐藤さい（大正四ノ九—五ノ八）田丸よね（大正三ノ二—四ノ十）
水澤せつ（大正三ノ二—四ノ十）有馬久江（大正三ノ二—四ノ十）
前原きく（大正三ノ二—四ノ十）
金參拾五錢也
吉岡りん（大正四ノ二—五ノ四）木下繁濃（大正四ノ二—五ノ四）
金七拾五錢也
河合孫子（大正四ノ十—五ノ九）中村玉子（大正四年八九月號十冊代）
金參圓九拾九錢也　共立女學校青年會（大正四年十月號五十七冊代）
金七圓參拾貳錢也　廣岡浅子（大正元ノ四—四ノ十二 三部宛）
金參拾五錢也　小口みのる（大正四ノ四—四ノ九）
金貳拾壹錢也　安孫子久江（大正四ノ十—四ノ十二）
金貳拾四錢也　鈴木とや（大正四ノ十—五ノ三）
金壹圓五拾　也　安藤坂寄宿舍（大正四ノ一—五ノ十二）
金壹圓四拾錢也　ケギー（大正四ノ十—ノ五ノ九 二部代）

National Committee

Headquarters. 12 Tamachi Sanchome, Ushigome, Tokyo

Mrs. Hana Ibuka, Chairman
Dr. Kei Okami, Vice-Chairman
Miss Tami Mitani, Secretary
Dr. Tomo Inouye, Treasurer
Miss Michi Kawai,
Active Member World's Committee

Resident Members	Non-Resident Members
Miss Ume Tsuda	Madame Asa Hirooka, Osaka
Miss A. B. West	Mrs. Koito Saiki, Kyoto
Miss Uta Suzuki	Miss M. F. Denton, Kyoto
Miss Kita Hasegawa	Miss Michi Matsuda, Kyoto
Miss Sarah Ellis	Miss Yoshi Kajiro, Okayama
Miss Chiyo Yamada	Miss K. Tristram, Osaka
Mrs. E. W. Clement	Miss Susan Searle, Kobe

Secretaries
Miss Michi Kawai, National
Miss A. C. Macdonald, National,
Miss Ruth Ragan, National Office
Miss Margaret Matthew, General, Tokyo
Miss Taka Kato, General Tokyo.
Miss Mary Page, Associate, Tokyo
Miss Emma Kaufman, Associate, Tokyo
Miss Mary Baker, General, Yokohama

本誌定價

一部（郵共）金七錢	一ケ年分 金七拾錢
海外 金拾壹錢	金壹圓廿錢

廣告料

一頁 金六圓	半頁 金三圓五十錢
四分ノ一 金貳圓	一行 金貳拾錢

大正四年十一月廿八日印刷納本
大正四年十二月一日發行

發行所　東京市牛込區田町三丁目十二番地　日本基督教女子青年會
編輯兼發行人　東京市牛込區田町三丁目十二番地　河井道子
印刷人　東京市芝區櫻田和泉町七番地　前川治次郎
印刷所　東京市芝區櫻田和泉町七番地　三成舍

日本基督教女子青年會

目的

日本全國の諸學校及び市邑に於ける青年女子の間に基督教女子青年會を設立し其一致聯合を圖り以て萬國基督教女子青年會と連絡する事

左の事項を奬勵す

青年女子の間に基督教的智識を普及し之を導き基督耶穌を救主として信奉せしむる事

青年女子の靈的生命を涵養し献身的行爲を勵し其智識社交身體の發達を圖る事

青年女子をして萬國に基督の王國を擴張せしむる事

會友

基督教女子青年會未設の地或は學校に於て本會の主旨を賛助し事業を奬勵せんと欲する者を以て本會の會友とす

會友の種類及會費は左の如し

通常　年　金壹圓　維持　年　金貳圓以上

會友には本會機關雜誌「女子青年界」を送附す

會友たらんと欲する者は本會本部に申出べし

事業一班

巡廻訪問　本會幹事を派遣して支部を奬勵し或は地方の巡廻視察をなさしめ本會の發展を圖る

出張講演　廣く一般女子の需に應じて講師を派遣す

機關雜誌　月刊「女子青年界」を發行し靈性智識の養に供す

紹介部　一般女子のため諸般の紹介をなす

寄宿舍　東京市内に青年女子の爲監督寄宿舍の設備有り將來他の都市にも設立せん事を期す

宿泊所　外國婦人の要求に應じ併て日本の眞相を紹介す

夏季修養會　毎年夏季山水明媚の勝地に開會し專ら女子の修養を圖る

旅行者の友　地方より上京する婦女子の保護を要する者の救濟保護に任ず

社會部　所屬幼稚園有り主として下級社會の幼兒を收容し且其家庭の傳道啓導につとむ

中央委員

委員長　井深花子

副委員長　岡見惠子

記録書記　三谷民子

會計　井上友子

萬國基督教女子青年會同盟委員　河井道子

委員

津田梅子（東京）

エ、ビ、ウエスト（東京）

鈴木歌子（東京）

小此木松子（東京）

長谷川喜多子（東京）

野星愛子（東京）

サラ、エリス（東京）

イ、クレメント（東京）

山田千代子（横濱）

城戸順子（横濱）

廣岡淺子（大阪）

ケー、トリストラム（大阪）

エム、エフ、デントン（京都）

佐伯小糸（京都）

松引道子（京都）

エス、ソール（神戸）

上代淑子（岡山）

役員

總幹事（本部）　河井道子

同（同）　エ、シー、マクドナルド

書記（同）　アール・レーガン

總幹事（東京）　エム、エル、マシウ

同（同）　加藤高子

特志幹事（同）　エム、ペーチ

特志幹事（同）　イー、アル、カツフマン

幹事（横濱）　エム、ペーカー

事務員（本部）　河口正子

同　湯田みの子

事務員（東京）　大呑き久子

事務員（横濱）　伊藤菊子

旅行者の友係　林ふさ

幼稚園主任保姆　松崎滿喜

幼稚園助手　大槻愛子

寄宿舍監（第一）　永野隆子

寄宿舍監（第二）　門倉ふじ

宿泊所取締　大西絹子

ミス、ダルトン

東京市牛込區田町三丁目十二番地

日本基督教女子青年會本部

大正五年度

日記

吾家の歴史

特製（四六版金縁總革製）壹圓卅五錢

並製（四六版總クロース製）五拾錢

△郵税各八錢▽

苟くも日記をおつけになる方ならば
是非にも『吾家』を御使用遊ばせ

クリスマスの贈答用として理想的の品は

野口精子著

歌集

夕ばえ

再版發賣

定價七拾錢
郵税金八錢

安井哲子著

久堅町にて

四六版美本

定價壹圓
郵税金八錢

發兌　東京京橋尾張町　警醒社書店　振替東京五五参

大正四年十一月廿八日印刷納本大正四年十二月一日發行　明治卅七年五月七日第三種郵便物認可

復刻版　女子青年界　第6巻

1992年7月10日発行
本体価格　22、000円

発行者　船橋　治
発行所　不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
〒113　☎03(3812)4433
印刷所　三　進　社
製本所　青木製本所
中性紙使用
乱丁・落丁はお取り替えいたします。